

“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について
— 『児女英雄伝』を中心とした“把+個+N+VP”構文の認知に関する考察—

Property of Object phrases and Function of Classifier
in the Structure of “Ba” : A Study of “*Ernü Ying Xiong Zhuan*”

藤田 益子
Ituko FUJITA

目次

1. “把”構文における賓語に前置された量詞“個”の機能
2. “把+個+N+VP”構文
 2. 1. Nの性質、役割、認知方法
 2. 2. Nが動作の受事の場合
 2. 3. Nが動作の「施事」と「受事」の両方に解釈が可能な場合
 2. 4. Nが動詞との間に直接施受の関係を持たない場合
 2. 5. その他特殊な用法
 2. 6. 主語と動詞の間に意思性が無い場合
3. “把+X+N+VP”構文
 3. 1. “個”以外の量詞の用例
 3. 2. “把+「量詞」+N+VP”構文における“個”とその他の量詞
4. “把+“一”+「量詞」+N+VP”構文
 4. 1. “把+一个+N+VP”構文
 4. 2. “把+一+X+N+VP”構文
5. “把+個+N+VP”構文の機能に関する分析
 5. 1. “個”の機能とは
 5. 2. “把”構文の賓語の性質
 5. 3. “把”構文の賓語と“個”
 5. 4. “把個N”のもつ指示性
 5. 5. まとめ
6. 修辭的用法
 6. 1. 意想外と想定外
 6. 2. 感情移入
 6. 3. 主題化
7. 其他の白話資料に見られる“把+個+N+VP”構文

1. “把”構文における賓語に前置された量詞“個”の機能

“把”構文：“把+N+Vp”形式において、賓語Nに量詞が前置される場合、中でも、Nの前に量詞“個”が置かれる構文は、ある種の機能と修辞効果を持った特殊な表現と考えられる。この“把+個+N+Vp”形式は、現代漢語にも見られるが、用法は限られている。一方、『兒女英雄伝』において、この形式は、100例余り確認出来、用例、方法共に豊富さは近現代の資料において突出しており、現代漢語¹では既に見ることができない用法も含まれている。以下では『兒女英雄伝』における“把+個+N+Vp”構文の用例とその意味、機能を解釈するため、“把”の直後の賓語（以下、略称をNとする）の性質と、量詞の用法、特に“個”の特異性という観点に基づき、“把個N”の本質的な文法的機能、語義を分析する。更に、この『兒女英雄伝』における修辭的描写効果についても合わせて考察する。

2. “把+個+N+Vp”構文

2. 1. Nの性質、役割、認知方法

Nの性質、役割、認知方法の三つの観点から、Nの状況を次のように分類する。

(1)Nの名詞の性質：

- ①人を表す普通名詞、②人を表す固有名詞、③物を表す普通名詞、④場所を表す普通名詞、⑤抽象的な内容を表す名詞、⑥身体部位を表す名詞等に分類された。

(2)Nの“把”構文における文法的な役割：

述語動詞との関係から、次の三種類に分けられる。

- ①「受事者（受け手・受動者）」
- ②「施事者（仕手・能動者）」
- ③「当事者」（動作行為の当事者であり、能動、受動の両方の対象となりうる）

(3)Nの文脈上の認知方法：

例えば、Nに係わる先行詞として、前にNと同じものを指示する同形の名詞が存在するものをN1とし、実質的にはNと全く同じものを指示するが別の表現（例えば換喩のような形）で存在するものをn1とした場合、次のような関係が見られる。

- ①Nに相当する同形の先行詞N1が存在する
- ②Nに相当するn1が存在する
- ③Nに相当するN1やn1が存在しない

以下、Nに関するこれらの観点から、“把+個+N+Vp”構文について分析を進める。

2. 2. Nが動作の受事の場合

『兒女英雄伝』では、普通名詞（人物、事物、場所）、固有名詞、抽象名詞がNに相当する。

2. 2. 1. Nが普通名詞（場所を示す例を除く）

2. 2. 1. 1. Nに対して、N 1が同形の先行詞として存在する

(1)N = 人物<和尚>

例：那秃和尚²手裡只剩得一尺來長兩根大鑷頭釘子似的東西，怎的個鬪³法？他說聲“不好”，丟下回頭就跑。那女子趕上一步，喝道：“狗男女，那裡走！”在背後舉起刀來，照他的右肩膀一刀，唵嚟，從左肋裡砍將過來，把個和尚弄成了“黃瓜腌葱”——剩了個斜岔兒了。（6）⁴

（その秃げ和尚は、手元に残った一尺ばかりの簪方の釘のようなもので、どうして戦うことが出来ましようか？「いかん」というと、放り出して逃げかけました。そこへ、その娘はサッと追いついて、「こいつめ、逃げるか！」と怒鳴ると、背中から刀を振り上げて、右の肩めがけて刀を一振り、バッサリと、左脇にかけて袈裟掛けに斬って落とし、なんとそんな和尚を胡瓜と葱の漬物みたいに斜交いに真っ二つにしてしまっただけでした。）

①照応関係とNの認定

この用例では、“把”構文におけるNは、文脈上で直前に出てきたN 1と同じ人物を指し示しており、そこにはいわゆる照応関係(anaphoricrelation)⁵が成立している。このような先行詞N 1は、しばしば指示詞“這”、“那”の修飾を受け、場合によっては複数回登場することもあり、N 1相当の語句が集積する情報量は少なくない。

この場面では、実際にはNに関わる3種類の和尚が存在する。“把個和尚”を見た読み手は、“和尚”とは、どのような“和尚”なのかを理解するため、まずそれに該当する先行詞を探しに行く。ここでの先行詞N 1は、“那秃和尚”（あのはげ和尚）で、これは、前の場面からの情報を引き継ぐ“和尚”を指している。習慣的に先行詞を探しに行く思考回路が働くのは、Nが“把”構文の賓語であるというその語法上の特性に由来するものである。基本的に“把”構文の賓語には、特定出来る（読み手と話し手が共通認識できる）対象が置かれるという理解があり、読み手にとって特定不可能なNは、賓語になり得ないという認識があるためである。そこで、読み手はまず、先行詞を探し出し、Nがどのようなものなのかを判別して、話題の対象物として確定する。この対象物の選定に至る過程は、普通の“把”構文における理解の方法と同じプロセスである。

②Nの特定部分がクローズアップされたイメージ像“個N”

次に、Nに“個”が前置されると、Nその「物」自体を指すのではなく、あるイメージ（此処で言うイメージとは抽象的なものである）を持ったNを表すことになる。前段のコンテキストよりNに集積された情報源の中から、動詞の動作行為に強く関わるNの一部の情報がクローズアップされ、その焦点の際立った特別なイメージがNの像として形成され、具象化される働きが出てくる。つまり、“把個N”は、当該文の叙述（特に動詞）で話題として言及しているNのある部分（側面）に特化した情報が集結して生まれる、話し手と聞き手の双

方に共通するイメージ像なのである。

そうだとすると、N1と“個N”は、同じ名詞を使用しているにもかかわらず、全く同じ物を表しているわけではない、N1と“個N”は、外見上同じ人型のケース（“和尚”という名詞）に入っている中身に相違があることになる。N1と“個N”がイコールでないならば、“個N”は初出の語ということになり、いわゆる“把”構文の賓語は、「定」であるという一般的な約束から外れることになってしまいそうである。

③ “把”構文の賓語に対する解釈

この問題を解消するものとしては、王還「“把”字句中“把”的賓語」に賓語の解析が挙げられる。“把”構文の賓語の種類について、王（1985, p.51）は、定、不定ではなく、1.“確指” 2.“汎指” 3.“專指”の3種類に分けている。ポイントを次に要約する。

「1.“確指”（確定指示）：「文中の動詞の制御を受け、動作を通して確定するに至るものである。この賓語を用いる“把”構文には、次のような条件がある。動作の動詞が後置成分を付帯し、賓語がどのような影響を受けたか説明するものであること。もしくは、文の重点は本来、「無から有へ」なのであるが、現時点で賓語が動作を通してどのような状態になったのかについて、転じて説明しなければならないものである。また、“確指”の賓語には、2種類の動詞においてのみ使用可能である。賓語自体が動作によって生産されるような動詞、或いは、想定外、予想外（原文：“意外”）な行動である。これらの予想外な行動の受事は、勿論“專指”でも良いが、やはり、“確指”の方が良く、すなわち、動作の前では不確定で、動作を通して確定するものなのである。だから、“專指”でもないし、“汎指”でもない。また、この“確指”の賓語が“把”字句に表れるためには、ある一つの事が既に事実を成したという叙述でなければならない。条件や仮説、一般的に時間性の無い道理の論述などということはありません。

例：“小林把一件毛背心织得又肥又长。”、“小张把個孩子生在火车上。”（原文ママ⁶、例文は一部抜粋）

2.“汎指”（不定指示）：この“把”字句で、最も良く見られるのは、一般的な道理の論述であり、時間性がない。（もし動作の前に“汎指”の事物が存在しない場合、後に付加成分が必要である）（例文省略⁷）

3.“專指”（特定指示）：最もよく見られる“把”構文の賓語であり、動詞が処置性であれば、どの“把”構文にも用いることができ、特段の条件はない。」

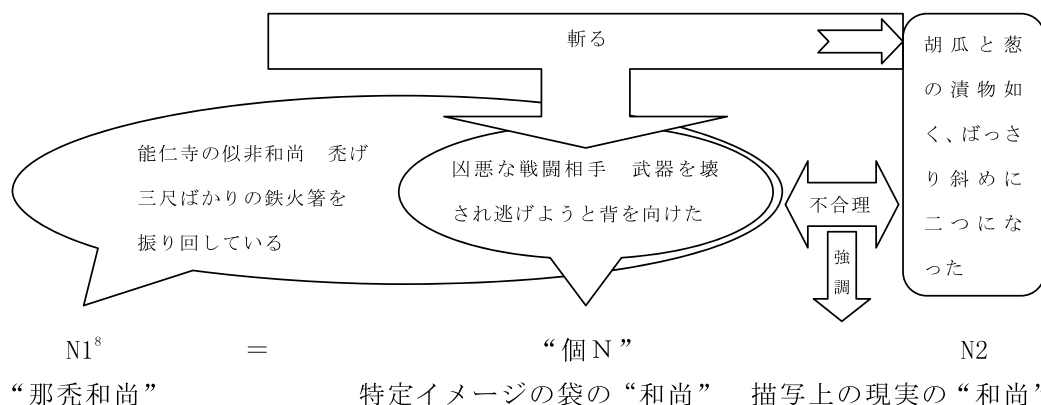
④ “個N”に制御をかける要素

この、“把個N”における“個N”は、主に動詞からの制御を受け、構文全体の叙述を通して確定するに至る内容を包括したNの像である。王氏の言うところの“確指”の分類に相当する賓語である。動詞は、“個N”の情報を制御し「このような動作行為の及んだN」を新たな存在として認めさせるだけでなく、その動作行為によって「Nに起こった結果」をも発生させる。この「結果」は、動詞の後置成分（主に補語、時にその後の賓語も含む）によって表現され、Nの叙述上、最終的に至った状態を表示している。以下、本論では、これをN2

として表記する。

⑤解析

ここまで述べたことを、例文に当てはめ図解すると下記のような構図となる。この場面では、N1、“個N”の他に、“把+“個”+N+Vp”構文によって説明された描写上のN2つまり、「体を二つに切られ殺された和尚」が存在する。



(図上の下線なしは、前段階での実際の文章描写、 は文脈や解説による認識、 は社会常識的な理解による知識であることを示す。以下の図も同様である。)

このような発想が、読み手の脳裏には一瞬にして連鎖的に行われており、わざわざ“把個N”構文を使って、読み手にこのような連想を行わせる最大の目的は次の点にある。読み手は、N1に関する様々な情報を認識しながら、“個”の存在によって、Nが単なる先行詞の事物の繰り返しとして表示されているのではなく、そこに包括されるべき情報があると考ええる。更に、脳裏に集められた情報の中から、動詞によって焦点の絞り込みが行われ、特化された情報を包括したNのイメージ像を形成することとなる。その、一方で構文全体によって“個N”とかけ離れた結果のN2が提示されると、“個N”とN2の状態に落差があればあるほど、その不合理から感じるギャップによって、読み手はインパクトを感じることになる。上記の例文では、一連の連想の結果、娘の強さを強調する効果を導き出している。このような修辭的な技法によって、講談小説の文章表現として読み手の脳裏に段階を追って事態に変化が起こる展開に、生き生きとした臨場感を生み出し、同時に驚きや、呆れ、怒りなどを感じさせることで、期待感、不快感などドラマに感情を引き付ける効果を高めている。

次の例文で、更に詳しく見ていく。Nが事物で、前文に先行詞が何度も出現する例である。

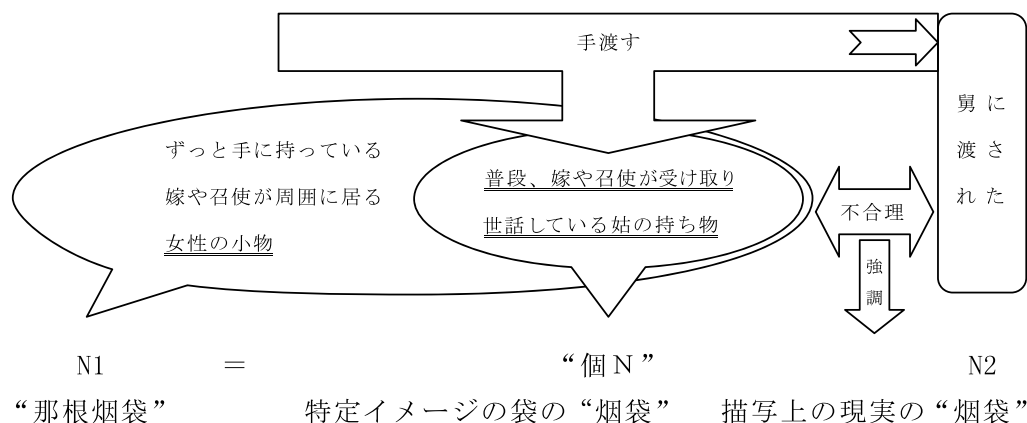
(2)N = モノ<烟袋>

例：太太手裡還拿着根烟袋。老爺見太太趕出來，便湊到太太面前道：“太太，你看這小子，他中也罷了，虧他怎麼還會中的這樣高！太太，你且看這個報單。”太太樂的雙手來接，那

雙手却攥着根烟袋，一個忘了神，便遞給老爺；妙在老爺也樂得忘了神，就接過那根烟袋去，一時連太太本是個認得字的也忘了，便拿着那根烟袋，指着報单上的字，一長一短念給太太聽。還是張姑娘看見，說：“喲！怎麼公公樂的把個烟袋遞給婆婆了？”只這一句，他纔把公公、婆婆說倒了過兒了！（35）

（奥様は手にはまだキセルを持っていました。学海様は奥様が出てきたのを見て奥様の前に駆け寄り、「あの子ときたら、受かっただけでも偉いのに、なんとこんな良い成績で合格してくれたよ。これを見てごらん。」といました。奥様は両手で受け取ろうとしたのですが、手にキセルを持ったままでしたので、ひょいと学海様に渡すと、学海様も嬉しさに我を忘れ、そのキセルを受け取って、奥様が字を読めるのも忘れて、そのキセルを持って、知らせ状の字を指しながら、一字一字読んでやります。それに張金鳳が、気がついて、「まあ、お父さまたら、あまりのお喜びで、こともあろうにキセルをお母様にお渡しなったりして。」と言いましたが、これまた舅と姑を取り違えております。

①解析



本来、図解に示した“個N”で導かれた特定イメージの袋には、2種類の出所が異なる情報が入り得る。一つは、直前の文中にNに関する具体的な描写や説明があり、そこから認識を得るものと、もう一つは、社会的な一般常識や、小説の場合は、ストーリーの別の場面でのNに関する描写や説明から、普遍的な認識が刷り込まれているものである。これは用例によって、どちらか一方の場合もあるし、両方の知識を併用して成り立つ場合もあるが、この例文では、読み手は、後者のこれまでの様々な場面で現れた描写や説明から、“個N”に関する特定の認識を得ている。“把”構文の叙述からは、姑が手に持った“烟袋”をとっさに手を開けるために手渡したことに焦点が当たり、“個N”では、「通常の誰との間でやり取りされているものなのか」という性格に関して際立った情報が集められ、イメージ像が形成される。この用例でも、やはり“烟袋”について“個N”とN2は相反するものとなっており、読み手にこの場での特定イメージ像と現実の不合理を感じさせることで、話し手は、「礼に反する行動、双方の非常識な行為であること」を強く印象付け、これによって常軌を逸した行動を取る程の状態を強調し、如何に大変な事態が発生しているのかという非日常性を読み手に理

解させようとしているのである。また、同時に、話し手のある種の主観的な感情をも表現しようとしている。例えば、例文から“個”を取って他の量詞“根”にしてしまうと、この“烟袋”の持つ上記図のような情報を集めてイメージの袋を作る作用がなくなり、単に物体としての“烟袋”を想定するだけになってしまうため、著者にとって意図するところは表現されなくなり、文意も変わってしまうことになるのである。

(3)その他の例

例：“儻若不肯，我也不叫你過於爲難，我這盒兒裡裝着一碗兒雙紅胭脂，一匣滴珠香粉，兩朵時樣的通草花兒，你打扮好了，就在這台上扭個週遭兒我瞧瞧，我塵土不沾，拍腿就走。”說罷，把個盒兒揭開，放在當中桌上。老弟，你說就讓是個泥佛兒罷，可能聽了不動氣？”(15)

(「『もし、いやだというのなら、この箱に口紅と白粉、流行の簪を持ってきた。これで一つ化粧して、舞台を一回りしてみる。とっくり拝見した上で、びた一文貰わずに引き上げてやる。』こう言って、なんと(化粧道具が詰まった)その箱を開けると、テーブルの真ん中にトンと置いたのです。こうまでされたのでは、たとえ泥の仏様でも怒らずにいられないと言うものでしょう?」)

2. 2. 1. 2. NとN1が異なる語で表現されている

先行詞N1がなく、Nの単語自体が初出であっても、関係語句や文脈の前後関係から先行詞N1に相当する語n1の存在が認識可能であることから、突然知らない単語が表れたような違和感を受けずに済むようなある種の技法が取られている。例えば、以下に挙げる例のように、先行詞に相当するn1に対し、その「プロトタイプ」⁹⁾に当たる語をNに活用することで、初出の単語でもNに唐突な感じを与えずに効果的にブレなく焦点の絞り込みが行われている。更に、レトリックないくつかの技法の活用することで、一層の修辭効果を持たせながら、初出の単語に照応表現としてのNの役割を果たさせる高度なテクニックが見られる。次に挙げるのは、「プロトタイプ」を活用した照応表現の用例である。Nは、n1の大カテゴリー¹⁰⁾に内包される小カテゴリーのプロトタイプであるが、n1とNの対応関係によって、更に以下のように(1)から(4)の4種類に分けることが出来る。

(1)Nは、最も中心的なn1のプロトタイプである

①N = 人物<孩子>

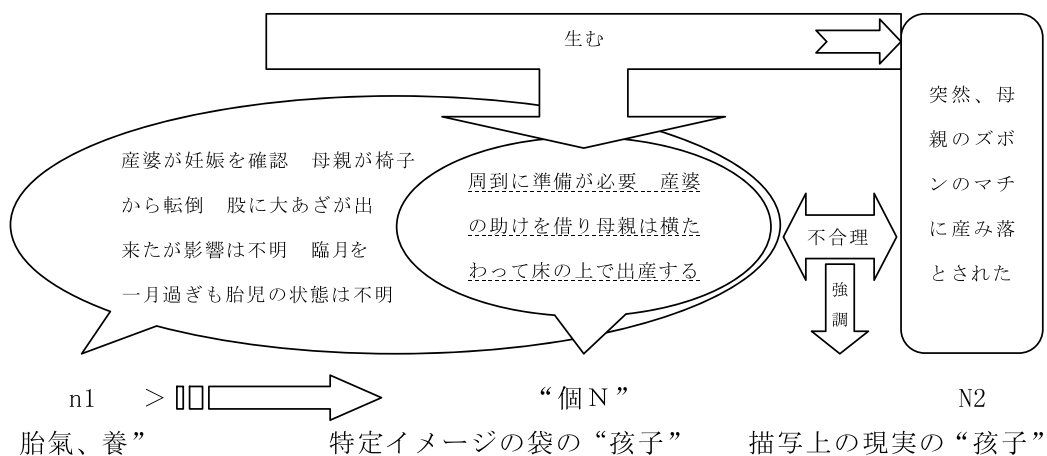
文脈を把握し先行詞を認識するために必要な例文の前段部分を次に挙げる。

「趕到兩多月上，只見他吃頓飯兒就是吐天兒哇地的鬧，我說：‘這是個甚麼原故呢，准是他娘的得了翻胃了。’還是你乾女兒說：‘別是胎氣罷？’這麼着，他就給找了個姥姥來，瞧了瞧，說是喜，我說這可真算得個新樣兒的了！’就那麼糊里糊塗的過了有四五個月。一天他忽然蹣着個板櫬子，上櫃子去不知那甚麼，不想一個不留神，把個板櫬子凳翻了，咕咚一跤跌下來，就跌了個大仰爬腳子。你說怪不怪，把跨骨裁青了巴掌大的一片，他這胎氣竟會任怎麼個兒沒

怎麼個兒！趕到該着月份兒了，大家都在那兒掐着指頭算着，盼他養，白說他可再也不養了，大是過了不差甚麼有一個多月呢。這天他正跟着我吃包，只見他纔打了個挺大的包握在嘴上吃着，忽然‘呖’了一聲，說是‘不好’，扔下包往屋裡就跑，我說：‘你們跟了去瞧瞧，是怎麼了？不是吃了個蒼蠅啊？’]

例：“正說着，這個人纔跟進屋子只聽得‘噶喇’的一聲，就把個孩子養在褲襠裡了，還是挺大的個胖小子！”(39)

(「女たちが追いかけて部屋に入って行って、ワッと一声聞こえたと思うと、赤ん坊を、ズボンのマチの中に産み落としてしまったのじゃ。これが丸々とした男の子でしてな！」)



Nである“孩子”に対しn1に相当するものとして、前文に関係を強く連想させる語句として、具体的な単語では、“胎氣”、“養”が考えられる。Nは、文脈情報からも、社会的常識からも、このn1から連想可能な関係の密接な語句であり、更に、n1に相当する語が説明する状況の帰結を表す語でもある。その点において、Nの“孩子”はn1の“胎氣”、“養”にとっての、典型的なプロトタイプの一つといえる。

更に、プロトタイプN“孩子”に対して、動詞の“養”（出産）という行為に関わる情報がクローズアップされるのだが、この例の場合は、社会的常識が情報源となりそこから焦点が絞り込まれ、“把個N”の像が形成される。

もし、Nが“個”を前置していなければ、Nとn1との繋がりを見つけることができなくなり、Nは、n1に含まれる一カテゴリーのプロトタイプと考えることが難しくなる。つまり、前段での様々な妊娠にまつわるそのお腹の子供であるという関連性が不明瞭になるため、話の続きとして読み進めることが出来なくなってしまうのである。

(2)Nは、n1の提喩を活用したプロトタイプである

次の用例も、Nが初出である点は先の“孩子”の例と同じであるが、話題の中心へのアプ

ローチの方法が異なる。上記の例で、最も話し手が焦点を当てたいのは、n1の“胎氣”、“養”のプロトタイプであり、話題の帰結点でもあるNである。一方、下記の例ではn1である“安公子”の際立たされたある側面を強調し情報を伝えるために、叙述による絞り込みのみに頼らず、Nに“小爺”という提喩を利用することでNの情報量を限定させ、更に焦点を絞りやすくしている。要するに、Nはn1のプロファイル¹¹(=際立たせ)のなされたカテゴリーの中のプロトタイプなのである。話題の対象となっているn1があり、そのn1に関して、叙述の展開として最も効果的なN、つまり、現実のN2との対比が際立つ特定イメージのプロトタイプをNとして提示する。これによりn1のある部分の特定イメージに効率的にフィルターをかけて正確に焦点として際立たせ、N2との不合理を効果的に対照表現している修辭的なテクニックである。

このような場合のNの性質は、全て受事であり、人物と物に関するものである。

①N = 人物<小爺>

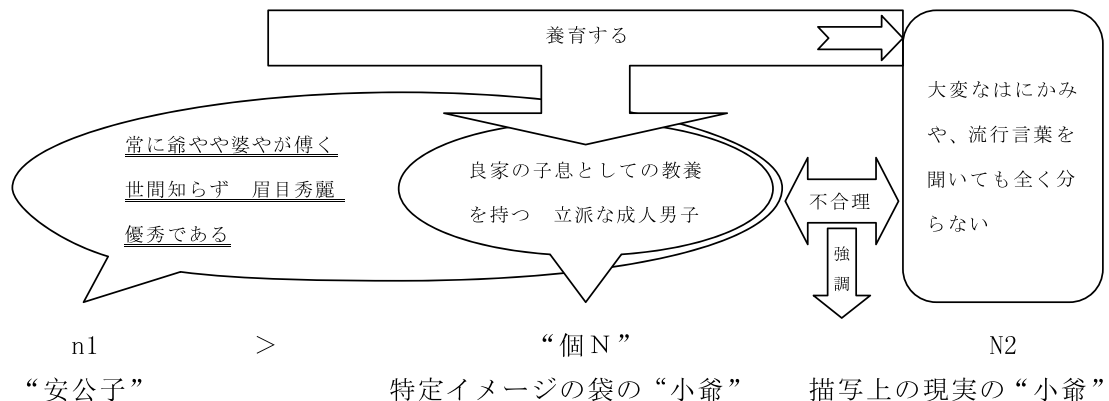
例文の前段の部分を次に挙げる。

「那時候公子的身量也漸漸的長成，出落得目秀眉清，溫文儒雅。只因養治得尊貴，還是乳母丫鬟圍隨着服侍。慢說外頭的戲館，飯莊，東西兩廟不肯教他混跑，就連自己的大門，也從不曾無故的出去站站望望。偶然到親戚一家兒走走，也是裡頭嬲嬲媽，外頭嬲嬲爹的跟着。」

例：因此上把個小爺養活得十分腴腆：聽見人說句外話，他都不懂；(1)

(良家のご子息として非常に恥ずかしがりやに育てられてしまったために、人が流行言葉を使うのを聴いただけで、意味が分らないのです。)

先の例同様、“個”を省略しても文として成立するが、Nがどのようなn1に対応しているのか明確に指し示すことができなくなり2者の関連づけが難しくなる。



②その他の例

以下の例も同様である。

<老頭子>

例：安老爺還要往下再問，鄧九公那邊兒早開了談了，說：“照這麼說，人家合你沒甚麼岔兒呀！該偌老爺兒們稿一稿咧！我且問你：你們認得我不認得？”四個人齊聲道：“不認得。”登時把個老頭子氣的紫漲了臉，嚷成一片，說道：“好哇，你們竟敢說不認得我！我告訴你，我姓鄧！可算不得天子腳底下的人，生長在江北淮安，住家在山東茌平，也有個小小的名聲兒，人稱我一聲鄧九公！”（31）

“老頭子”は、鄧九公のことを指している。同じ名前を繰り返し使わず、“老頭子”に差し替えることで、読み手に対して鄧九公の持つイメージの中の“老頭子”（老人、年寄）の性質が印象付ける側面をクローズアップする方法を取っている。

<親女兒>

例：只聽他向安老爺道：“了不得！了不得！我又落在後頭了！我從那天聽見這張姑奶奶勸我們姑奶奶那番話，我就恨不得立刻叫他聲‘好孩子’，想要認他作個乾女兒。不想我的乾女兒沒得認成，倒把個親女兒叫弟夫人拐了去了！”（32）

（聞くと、学海様に向かって言った。「これは参った。わしがまたおいてけぼりを食ってしまった。実は、前にこちらの張家の娘さんが、玉鳳さんにこう勧めていたのを聞いて、本当に良く出来た人だと思い、義理の娘になってもらいたいと思ったのだが、わしが言い出さぬうちに、反対に実の娘をあんたの奥さんにとられてしまったではないか！」）

先行詞として、直前の文にNの“親女兒”という単語は出てこない。ただ、文脈から、“褚大娘子”が鄧九公の娘であることは、読み手には、周知のことである。ここでは、“親女兒”（実の娘）が、n 1に相当する“褚大娘子”の鄭家の血筋を引く娘としての側面をプロファイルしている。更に、それと対照的な意味を表す“乾女兒”を前文に提示することで、娘である“褚大娘子”という大カテゴリーの中でも、特に血が繋がった実子という小カテゴリーに焦点が当たるよう、対照的な複線が張られている。そして、最終的に娘の中でもここでのプロトタイプとなる“親女兒”が正確にこれを受け止めている複雑な技巧が用いられている。

このほか、例のみ挙げておく。

<新郎>

例：一句沒說完，姑娘只把腕子輕輕兒的往懷裡一帶，公子早立脚不穩，一個撲虎兒往前一撲，險些就要磕在那銅盆架上咧！只見姑娘抬起一隻小脚兒來，把那脚面一繃，平伸腿往上一挑，早把個新郎擎住了，不曾跌下去。新郎盤槓子似的盤了半日，纔站起來，笑道：“怎麼又拿出看家的本事來了？”（28）

例：我說：‘這也不知是他自己驚出這股子橫勁來了，也不知是倆媳婦兒把個懶驢子逼的上

了磨了?’聽聽，果然應了我的話了不是？”(37)

また、次の例のように、更にNに修飾語がつく用例もある。Nのイメージの中でも、N2とのコントラストを明確にし、プロフィールの誘導を手助けしたり、更に強調したりすることで、情報の際立ちにズレが生じないようにする補助的な役割があると考えられる。

<鐵錚錚的漢子> (先行詞に相当するn1は“這位爺”である。)

前文は、次の通りである。

「這話到了那紀大將軍耳朵裡，他老羞變怒，便借樁公事，忒了這位爺一本，道他“剛愎任性，遺悞軍情”。那時紀大將軍忒一員官也只當抹個臭虫，那個敢出來辯這冤枉？」

例：可憐就把個鐵錚錚的漢子立刻革職拿問，掐在監牢。不上幾日，一口暗氣鬱結而亡。(18)

(気の毒に、この剛直漢は、たちまち職を免じられて獄中の人となり、無念の思いを晴らす術もないまま、数日せずして悶死したのでした。)

(3)Nは、n1の隠喩を活用したプロトタイプである

①N = モノ<平日愛如性命的得寶子>

次の例におけるNの“寶子”は、n1の“楊貴妃”という人物の間に成り立つ「大切さや愛おしさ」という類似性の共通項に基づいて用いられた隠喩である。本来、異なる種類のカテゴリーに属する2者であるが、共通する内包カテゴリーの重ね合わせから、プロフィールしたい「大切なもの」というカテゴリーに焦点を当て、そのプロトタイプである“寶子”という語がNとして使われている。

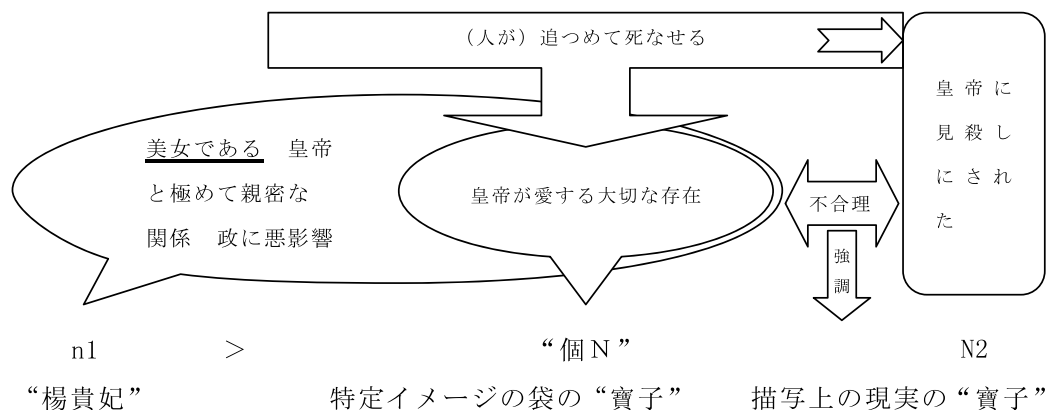
次の例は、ひとつの段落中に、楊貴妃に対して、“一個楊貴妃”(楊貴妃という一人の人)、“把個楊貴妃”(こともあろうに、かの楊貴妃を)、“那楊貴妃”(その楊貴妃は)、“把個平日愛如性命的得寶子”(何としたことか命より大事なかくの如き宝物を)と、複数の変化した表現を連続させている。“把個”を2度立て続けに使用し、更に、2度目は換喩を用いることで、一層の修辭的効果を高めている。

例文の前段部分は次の通り。

「再要講到兒女，第一個情深義重的莫如唐明皇。為了一個楊貴妃，焚香密誓，私語告天，道是‘在天願為比翼鳥，在地願為連理枝。’這番恩愛，似乎算得是個兒女情長了。究竟算不得，何也？”“當元宗天寶改元以後，把個楊貴妃寵得迭蕩驕縱，幃薄不修。那楊貴妃的來歷倒也不消提起，致傷忠厚。獨怪他既有個梅妃，又想着楊妃，及至得了楊妃，便棄了梅妃；又不能終棄梅妃，以至惹下楊妃。自己左右的兩個人尚且調停不轉，又丟下六宮佳麗，私通三國夫人。除了選色徵歌之外，一槩付之不聞不問。任着那五王交橫，奸相當權，激反胡奴，漁陽兵起。他却有賊不討，轉把個不穩的天下丟開不問，帶上個受累的貴妃，避禍而行。」

例：至弄到兵變馬嵬，六軍抗命，却又束手無策，不知究奸相、責驕帥、斬亂兵，眼睜睜的
看着人把個平日愛如性命的得寶子生生逼死。(0)

(馬嵬で兵が反逆を起こし、率いる六軍が命令に従わず、対処の策ありません。悪い
宰相を追及せず、増長した軍部を責めず、反乱の元も断たず、ぼやぼやして、日ご
ろ命のように愛している宝物を、人が死に追いやるのをむざむざと見ていました。)



②その他の例

このほか、次の用例も、同様のタイプであるが、後で他の量詞との比較の項目で扱うので
例文のみ挙げる。

例：“儻然這些女眷們不論那一時、那個人提起來，都拉住手要瞧瞧希希罕兒，那時我却把個
‘有詩為証’的東西，弄到‘流水落花春去也，天上人間’了。——別人猶可，只這小金
鳳兒，雖說我只比他大兩歲，我可合他充了這一年的老姐姐了，叫我怎的見他？”(28)

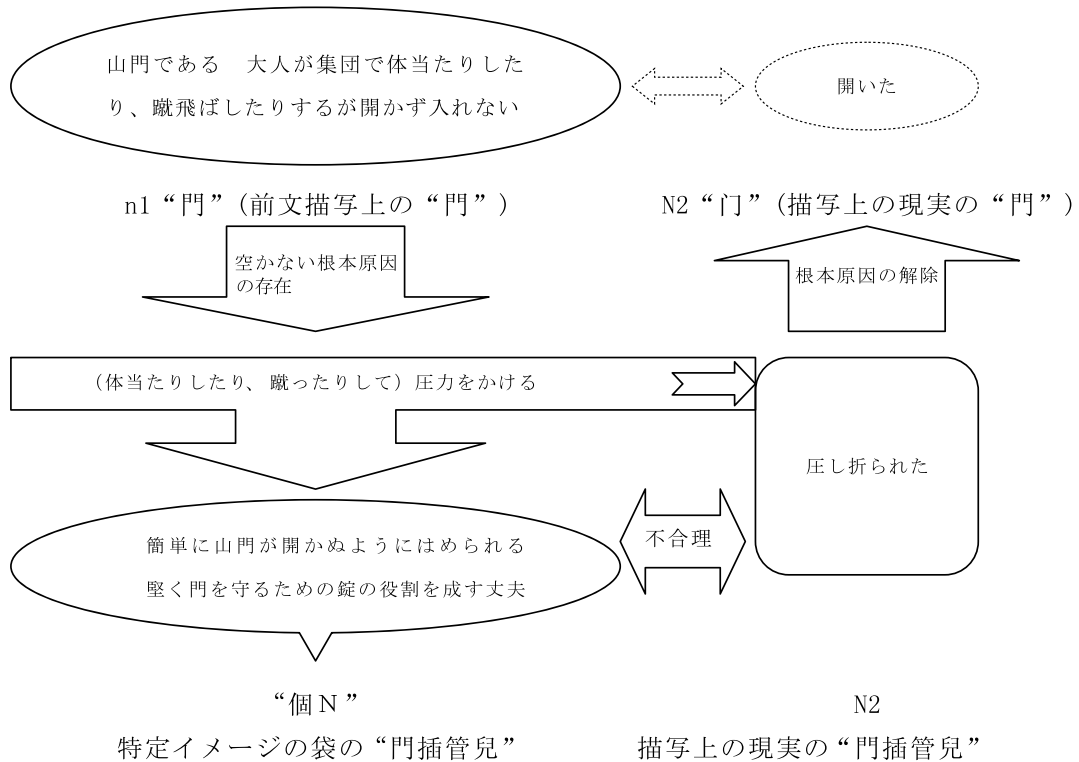
(4)Nは、n1の換喩を活用した参照点としてのプロトタイプである

①N = モノ “門插管兒”

例：正在叫不開，那些三班衙役也有趕到前頭來的，大家一頓亂推帶踹，把個門插管兒弄折
了，門纔得開。(11)

(そうこうするうちに、役所の小物たちが追いついてきたので、皆で体をぶついたり、
蹴ったり、なんとその門をへし折って、門を開けることが出来たのでした。)

換喩 (metonymy)¹²の参照点能力¹³を活用した技法と考えられる。N (“門插管”)は、文脈
上n1 (“門”)にとってのキーワードとなるものである。先行する語の字義通りの意味によっ
て示されるn1 (“門”)と、その象徴的な意味を持って比喩的に示される“個N” (“個門插
管”)の間に、密接な関係があり、Nは描写上のキーポイントである。この場合の参照点とし
ては、「門が開かないようにする根本原因である鍵」を想定しており、そのプロトタイプとな
るものが「門」 (“門插管”)である。



前文に“門挿管兒”は一切提示されておらず、“把個”の後ろに初めて出てくる語であるが、Nの“門挿管兒”は、もともとn1“門”の認知モデル¹⁴の中に存在するものである。「門」の開閉の鍵は、「門」に集約されることから、「門」に対するキーワード「門」を換喩（metonymy）とする修辞法である。N（“門挿管兒”）は、n1（“門”）にとっての急所としてのイメージを髣髴させ、コンテクスト上で話題となっている「ある事態」が完結に至るためのポイントである。

(5)プロトタイプ、メトニミーを活用した修辞法の特徴

細かい手法の相違によって4種類に分けられたが、これらのプロトタイプを活用した修辞法は、特徴を次のようにまとめることができる。先行詞n1とNとは、直接的に全く同じ事物を指しているわけではなく、Nは談話における先行詞n1のカテゴリーの中で、その構文中の動作動詞のキーになる対象を焦点化し対照切片としている。これにより、2つの修辞的効果が考えられる。1、カテゴリーの範疇の広さを利用して、話題の中心部分をずらすことにより、n1、“個N”、N2の間に3種類の用語や表現の転換という変化が起こるため、読み手に対して情景に引き込む漸層法¹⁵の効果を狙うことが出来る。2、ずらした切片N¹⁶は、まさに先行切片n1のカテゴリーの要素における話題上の焦点であり、焦点化への絞込みを利用したキーポイントへの注目を高める強調効果がある。

2. 2. 1. 3. N1又はn1に相当する語句が文中に全く出てこない

次の例では、前文の状況説明において、N1若しくは、n1に相当する先行詞が全く見当

たらない。読み手は、コンテキストに頼ることが出来ないため、完全に一般的な常識に基づき、N1を認識しなければならない。ただし、状況説明の背景から、一般的な常識に基づいて脳裏にN1又はn1の出現の可能性を暗示することが出来るため、前段階から情報を得て包括する機能を持つ“把個”が付くことで、文中でのNは初出の語でありながら、どのようなNを指しているのか分からず、読み手が困惑するような印象を与えることはない。ただし、『儿女英雄伝』でもこのようなこのような用法は1例を見るのみであり、比較的特殊なタイプと見られる¹⁷。

①N = モノ < 平果 >

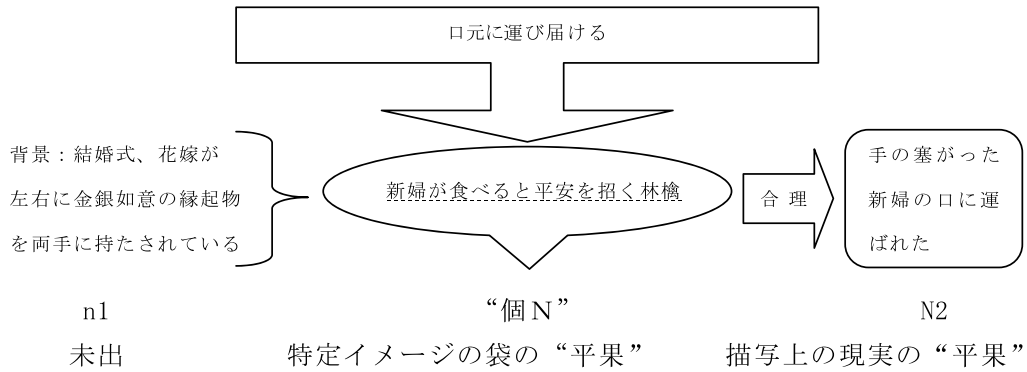
例文の前段部分（林檎に関する表現は全くない）

「看看交了酉初二刻，恰好轎子也將近到門，安太太便給姑娘蓋上蓋頭，起身回去。這個當兒，舅太太倒迴避了，躲在外間排插後面，借着捨不得姑娘在那裡落淚。安太太走後，只聽得鼓樂喧天，花轎已到門首。搭進院子來，抽去老桿，眾家人手捧進來，安得面向東南。只聽戴嬾合隨緣兒媳婦一條一條的往屋裡要紅氈子，地下兩三層的鋪得平穩。」

例：褚大娘子便遞給姑娘一個小金如意兒，一個小銀錠兒，兩手攥着，取“左金右銀，必定如意”之兆。張姑娘又把個平果送在他嘴邊，姑娘被蓋頭這一握，握得一心的心火，正用得着，便大大的咬了一口，還要再吃，却早拿開了。(27)

(褚一官の女房が、玉鳳に一つの金の如意と一つの小さな銀の銀塊を手渡しましたので、両手に握りました。「左に金、右に銀、必ずや如意」の兆しを招く縁起ものでございます。そこへ張金鳳が、例の縁起物のりんごを彼女の口元に運んできたりしたので、彼女は花嫁の被り物で覆われて、イライラしていたところでもあり、まさにここぞとばかり、大きな口でガブリと一口かじりましたが、もう一口食べようとする、早々にりんごは取り下げられてしまいました。)

このような、新婦に林檎を与える状況は、他の清代の小説にも見られ、この時期の結婚式の風習には、花嫁に林檎を与える習慣があったことが伺える。また、『清宮禁二年記』によると、“所有水果，皆寓庆祝意。如苹果者，谓平安也。”とあることから、平安を祈る縁起物としての意味を持つことが分かる¹⁸。事前に結婚式の場面であることを説明し、縁起物の描写を並べ、読み手の意識の中にそのシーンを呼び起こしておくことによって、例え、初出の「林檎」が“把”構文の賓語として突然現れたとしても、読み手は、背景や付随するしきたりを脳裏に描いていることから、唐突な印象を与えられることはないのである。更にこの“平果”という語が、「林檎を新婦の口元に運んだ」という叙述上に表現されることによって、違和感なく「平安を願って新婦に食べさせる習慣の例の林檎」という連想をすることが出来るのである。こうした連想と誘導により、Nに関する情報収集を正確に行わせることで、“個N”がどのような性質の林檎なのかを特定することが可能となる。



(2)先行詞N 1の有無に係わる相違

この用例の最大の特徴は先行詞に相当する語句Nやn 1を一切持たないという点である。そこで、“把個N”と先行詞の関係について考えてみたい。

①先行詞N 1（又はn 1）がある場合

既にN 1（又はn 1）によって示されたターゲットは、一つの重要な情報源であり、話し手、読み手の双方から共通の情報として認識される。この共有可能な情報に対して、叙述から焦点が絞り込まれることで限定された情報が集結した像が形成される。

②先行詞N 1（又はn 1）が無い場合

Nには事前に示された共通認識がない。しかし、“把”構文の賓語である以上、共通認識が存在することが前提となるため、読み手は、提示された情報以外に共有可能な認識を探しに行くこととなる。その結果、文章の説明によって加えられた情報ではなく、そのもの自体が元々持っている性質を情報源として情報収集を行うこととなる。例えば、『児女英雄伝』の“平果”の例では、結婚式の最中に、縁起物を花嫁に与える場面に出てくる“平果”という初出の語に対して、直前に羅列された結婚式に用いられる縁起物の描写に誘導され、縁起物の中でも、更に新婦の口元に運ばれ得るものという情報に焦点が当たって絞り込みが行われる。その結果、合致する情報として林檎を特定するに至る。（その後、絞り込まれた情報が“個”によって、イメージ像を形成される点は、先行詞が有る場合と同じである。）

コンテキストや文化・社会における常識的な背景を情報源に活用し、共通認識として呼び起こさせる知識とは、一般論に訴えることの出来る普遍性を持った固定概念でなければならない。そのため、N 1の包括する多くの情報源から、一部の情報がクローズアップされて絞り込まれるような現象は起こり得ない。動詞が情報を制御し限定する前に、既にコンテキストからその性質がクローズアップされ対象物が絞り込まれているからである。そのため、事前に制約された情報と動詞による絞り込みは、重なり合うような形となり、結果として動詞はNがどのような性質を持った物であるかを特定するのに作用するに止まる。同時に、話し手は、聞き手（読み手）に対し喚起する共通認識に関して、意図的な情報操作を行うことも

出来ないし、構文全体が表現する内容のN2と“個N”のイメージ像との間に大きなギャップを生じさせ、衝撃を与える修辞効果を狙うことも不可能となる。裏を返せば、このような例では、自然に常識感覚を呼び起こすための順行な叙述の上に、Nが現れることが必要不可欠になる。例えば、「結婚式」という背景があっても、“苹果”という語が、“金鳳把個苹果掉下了。”¹⁹「金鳳は林檎を落とした」という本来の常識的な成り行き延長線上に馴染まない叙述文に現れたりすると、常識的に想定するストーリーとは適合しないので、どのような性質の林檎なのか限定しきれなくなり、読み手は林檎その物自体を確定することができなくなってしまふのである。

2. 2. 2. Nが固有名詞

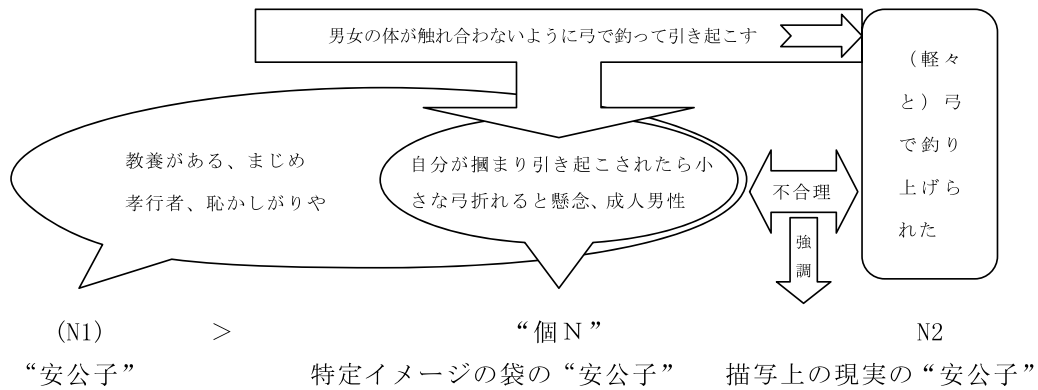
“個”+固有名詞の場合も、イメージによって像を形成する機能は、これまでの一般の名詞の場合と同様にあると考えられる。ただ、普通名詞と異なるのは、“個”+固有名詞の場合、読み手は、事前に提示された先行詞に頼らなくても、直接固有名詞Nについて、これまでに既に得ている情報から、N1として人物の性質や性格、状況を彷彿させることで、Nのアウトラインを描き、ある程度、イメージを脳裏に抱かせることができる点である。²⁰しかし同時に、固有名詞の場合、Nのイメージの中にいくつかのプロトタイプが複雑に存在することも事実である。最初にとりあげた、「和尚」の例のように、直前までN1の「和尚」に対する描写があり、どのような「和尚」なのか説明がなされていて、直後に「娘の対戦相手の和尚」として“個N”が像にブレのない形で文脈に引き継がれているような例よりも、はるかに状況が複雑である。様々に語られた複雑な人物情報N1に対して、プロフィール（際立たせ）を行い、どの側面を焦点として“個N”の人物像として切り出すかは、やはり“把”構文の文意（特に動詞を含む述部）にかかってくる。

(1)N = 固有名詞<安公子>

例：公子果然用手攀住了那弓面子，只見那女子左手把弓靶一托，右手將弓稍一按，釣魚兒的一般輕輕的就把個安公子釣了起來。（6）

（若様が果たして弓にすがりつくと、娘は左手で弓の柄を支え、右手で弓筈を持って、まるで魚でも釣るように、軽々となんとその若様を吊り上げました。）

この例文の場合、娘が、男性と体が触れ合わないようにするため、弓につかまらせて助け起こそうとする動作の対象“安公子”の成人男性という側面が、プロフィールされ、男性としての有様や体格、体重に焦点の当たった“安公子”が“個N”の示すイメージ像となっている。これに対して、N2の状態には女性に釣り上げられるひ弱さ、軽さが対照的な事象として取り上げられている。話し手の主観的な驚きや呆れなどの感情を演出するため、最も効果的なプロフィールによる焦点化が行われ、該当するカテゴリーを形成するためのNとして、ある特徴を持った“安公子”の像が導き出されているのである。



(2)その他の例

<楊貴妃>

例：“再要講到兒女，第一個情深義重的莫如唐明皇。為了一個楊貴妃，焚香密誓，私語告天，道是‘在天願為比翼鳥，在地願為連理枝。’這番恩愛，似乎算得是個兒女情長了。究竟算不得，何也？”“當元宗天寶改元以後，把個楊貴妃寵得迭蕩驕縱，幃薄不修。那楊貴妃的來歷倒也不消提起，致傷忠厚。”（0）

（「また、男女というものについて言うならば、第一に情に深く義を重んじたのは、唐の玄宗皇帝にしかる者はあるまい。楊貴妃のために、香を焚き誓いを立て、天に自分の気持ちを持って、曰く「天にあっては比翼鳥となることを願い、地にあっては連理の枝となることを願う。」このような情愛は、まるで「兒女情長」（実に深い男女の愛情がこもっている）と言えるだろう。しかし、結局は、このようには行かなかったのだ。なぜかという、玄宗の天寶の改元以降は、なんとその楊貴妃を寵愛し、傲慢、我侷、勝手気ままになって、身持ちを崩し、その楊貴妃の由緒は挙げるに及ばず、真心があり情の深い人をも傷つけてしまったのだ。）」

楊貴妃の場合は、Nの特定イメージは、前文と社会的認識の両方に拠るものと考えられる。

<安公子>

例：兩個人都是好意，不想這番好意，把個可左可右的安公子此時倒弄到左右不知所可。（31）
（二人はいずれも善意であり、この善意が、どちらにころんでも構わないそんな若様を、却って右か左がどちらにすれば良いのか、どうするべきか分からず悩ませてしまっているとは思いませんでした。）

次の例は、Nに修飾語がついて、プロフィールへの誘導を手助けし、更にその性質を強調している。

<十三妹（受事主語）>

例：張姑娘這幾句話說得軟中帶硬，八面兒見光，包羅萬象。把個鐵錚錚的十三妹倒寄放在那裡，為起難來了，只得免強說道：“呸，豈有此理！難道僂們作女孩兒的活得不值了，倒去將就人家不成？（10）

(金鳳の話は、やんわりと理を尽くして八方、そつがありません。あの錚々たる十三妹をあえてこんな場に追いやると、困り出して、しかたなく負けず嫌いなところで、「ふん、そんな馬鹿なことがあるもんですか。それじゃあたしたち女は一文の値打ちも無いもので、他人さまのために生きていけばいいとでも言うの？」と言いました。)

2. 2. 3. Nが抽象的な名詞

Nに対応する先行詞N1やn1は、具体的な語としては現れないタイプである。単語としては初出の語であり、Nの表す内容を前文の説明から想定する必要がある。前文に現れた具象的な名詞や説明などの情報から、帰納された一つの抽象的概念に対して、“把個”は、あたかも一つの形を持つ事物のように表現する働きをしている。

このタイプのNには“家風”、“姻縁”、“道理”、“見識”、“心”などの例がある。

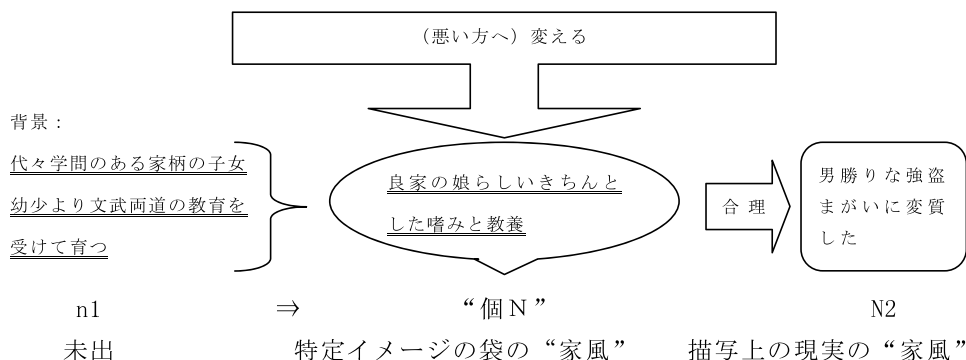
①N = 抽象的な物事<紅粉的家風>

例文の前段部分

「那姑娘道：“這也有個原故。我家原是歷代書香，我自幼也曾讀書識字。自從我祖父手裡就了武職，便講究些兵法陣圖，練習各般武備，因此我父親得了家學真傳。那時我在旁見了這些東西，便無般的不愛。我父親膝下無兒，就把我當個男孩兒教養。見我性情合這事相近，閒來也指點我些刀法槍法，久之，就漸漸曉得了些道理。及至看了那各種兵書，纔知不但技藝可以練得精，就是膂力也可以練得到。若論十八般兵器，我都算拿得起來。只這刀法、鎗法、彈弓、袖箭、拳腳，却是老人家口傳心授。又得那位老英雄贈我的這頭驢兒。這驢兒日行五百里，但遇着歹人，或者異怪物事，他便咆哮不止，真真是個神物。」

例：因此任我所為，就把個紅粉的家風，作成個綠林的變相。這便是我的來歷。(8)

(こんなわけで、いつの間にか、私は婦女の家門というものを強盗まがいのものにしてしまったというわけ。これが私の生い立ちよ。)



“個”の機能には、もともと、物事を総体的に包括する機能があり、話題となっている対象に関して情報収集した内容を袋に入れて一つの「物」にするような役割があると考えられる。

“把個” + 「抽象的な内容、思想」は、N1 (又はn1) に相当する複数の事象との照応関

係によって、Nに関わる具体的な情報を得ながら、“個”によってそのイメージを一つに包括することにより、対象となるNを具象的な物事、出来事として成り立たせている。例えば、“個”がない場合は、Nに対して抽象的な内容のイメージを包括するプロセスが欠けるので、読者に前文に出てきた物事や出来事を、Nに関連する要素として連想させることができない上、ぼんやりと広がりを見せる抽象的なNに対して、具体性のある明確な対象範囲を限定し、その意味する内容をひとつの「物事」として認知することができなくなる。大河内（1985, p. 7）では、次のように説明している。「中国語の名詞が“一个”を取ることによって、指示されえる「もの」になるということである。類名や総称である名詞は単体ではない。ある種の抽象の中にある。これを具体的な世界の「もの」に換えるのが、“一个”の働きであり、「あれ」、「これ」の指示が可能な「もの」となるのである。」つまり、“把+個+抽象名詞”の構文において、“個”は、このような照応するイメージの個体化機能による具象化の役目を担っているものと考えられる。また、このタイプの用例も、先に述べた“平果”の例と同様先行詞による情報収集がおこなわれないため、事前に提供された情報に対して叙述によるプロフィールは行われない。そのため、情報操作も行われず、“個N”とN2の間に不合理によるギャップも生じない。『儿女英雄伝』では、“把+個+抽象名詞”の場合、定語の修飾を受けている用例が多い。抽象名詞のイメージ化を助け、一層具象的な事物として捉えるために、事前の情報量を制限することでNの絞り込みをしやすくするためと考えられる。

②その他の例

<眼前姻縁>

例：“假如我這心、我這話可以搖動，當日我救這位公子的時候，在悅來店也曾合他共坐長談，在能仁寺也曾合他深更獨對，那時我便學來那班才子佳人的故套，自訂終身，又誰來管我？我為甚麼把個眼前姻縁雙手送給個萍水相逢素昧平生的張金鳳？”（25）

（「もし、私のこの心、この話が揺らぐくらいなら、こちらの若様を助けたあの日、かつて悦来店で若様と共に座って長話をしたり、以前、能仁寺で夜遅くまで二人きりでいた時に、才徳の備わった立派な男子とみめ麗しい女性の習慣に習い、自ら縁組を取り決めても、誰が文句を言うわけでもなし。どうして目の前の縁談というものを見ず知らずの金鳳さんにみすみす差し上げてしまったりするのでしょうか。）」

<道理>

例：不知這位舅太太怎的一眼把個生剋制化的道理看破了，只要舅太太一開口，水心先生那副正經面孔便有些整頓不起來。（36）

（この伯母はどうして、一目で自然の摂理を説く道理というものを見破ってしまったのかは分かりませんが、彼女が口火を切っただけで、学海様のしかめ面は、緩み始めていました。）

<見識>

例：“這姑娘の見解雖說愚忠愚孝，其實可敬可憐，但是事情到了這個場中，斷無中止的理。治病尋源，他這病源全在痛親而不知慰親，守志而不知繼志，所以纔把個見識弄左了。”

(25)

（「この娘の考え方が、愚直といえは愚直だが、一方では実に立派な心がけだ。しかし、事ここに至ったからには、断じて引っ込める理はない。病を治すには根源を治すべきで、彼女の病の源は、親を悼むが親を慰めることをせず、己の志をまもることばかり考えて、親の志を継ぐことを考えないところにある。だから、かくの如き考えには、まともに取り合わないことにしよう。」)

<心>

例：“噯！大姐姐，你那裡知道我這心裡的苦楚！你沒見你妹夫，是作了一任芝蔴大的外官兒，把個心傷透了。” (40)

（「まあ、お姉様、あなたには私のこの気持が分らないのよ！あなただっ、うちの人、たかがゴマ粒みたいな地方官で、どれだけ心を痛めたか、まさか知らないわけじゃないでしょ。」)

2. 3. Nが動作の「施事」と「受事」の両方に解釈が可能な場合²¹

『兒女英雄伝』においては、2つのタイプが確認される。ひとつは、Nが身体器官であるもの、もう一つは、Nが人物でVが感情を表す動詞であるものである。

2. 3. 1. Nが身体器官

Nが身体の器官の場合、動作主でも受動者でもなく、当事者と位置づけられる。このような身体の器官が“把+個+N”構文のNとして働く場合、土井（2000, p. 41）では次のような解釈がなされている。「杉村（1998）に紹介されている“沈老爷子恨不得把個脑袋扎裤裆里去。”のような、身体部位に“個”が附加された“把個+身体部位”の用例は、筆者が行った検索では一件もなかった。このことは“把個+Sの身体部位”が奇妙な表現であることを示す証拠ではなかろうか。つまり、“個”の附加により、身体の一部の属性が強調されるために、身体部位があたかもSの体から分離し、一つの個体となったような状態を作り出していると考えるのである。」

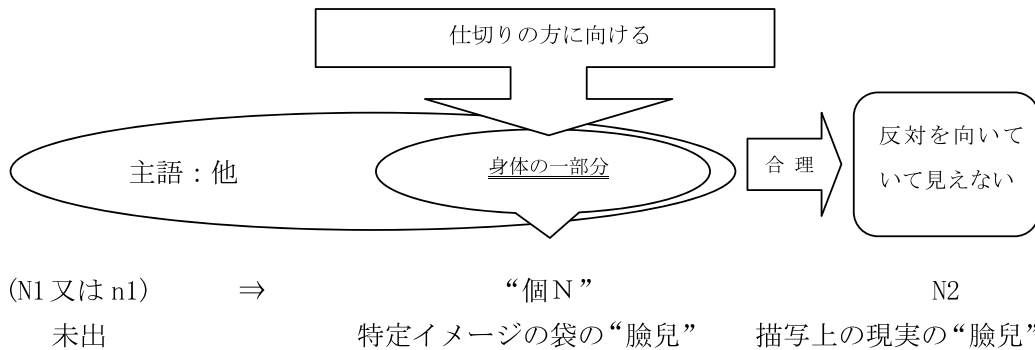
『兒女英雄伝』における“把個+身体器官”の表現は10例²²あり、何れもその直前に現れる主語の一部である。通常、“把”構文のNの前に“個”が付加されると、これまでの例文同様、Nのイメージを作るためどのようなNなのか情報収集のため先行詞を探す必要があるわけだが、これらの身体部位の用例に、先行詞（N1やn1）に相当する語句は見当たらない。先行詞がない例としては、普通名詞では“平果”と抽象名詞の用例があったが、これらは前文の説明や社会常識からNに関する情報収集が可能であった。一方、相原（1985, p. 27）は、「身体部位Nに働きかける場合、働きかけをする人（Agent, シテ、動作主）と身体部位N

の所属先が一致していなければその身体部位Nは所属先を示すマークを持たねばならない。この原則は中国語において高い一般性を有する」と解説する。これはNを受事と解釈した考え方に基づくものであるが、例えNを当事と看做しても、該当する文の主語と賓語の関係にあることには違いが無く、やはり、特に指示が無い賓語については、その直前にある主語の身体部位と考えるのが自然である。このように、Nが身体器官である場合の情報収集の矛先は、Nの先行詞に相当するN1やn1の持つ背景やストーリーに向くのではなく、誰の、若しくは何の部分なのかを確認したところで終結する。受事、当事何れの解釈においても、直前の主部に位置する人物が、身体の部分・器官であるNにとって、基本的にその持ち主ということになり、Nとその人物はいわゆる帰属の関係にあると言える。それゆえ、このような“把+個+身体器官”のような用例に対しては、“把個N”は、「器官や部位の主体であるSに対し、帰属関係を特定することで、Nがその人物の一部であることを明確化する」ための帰属性の働きを持つと考える。そのため、他の先行詞のない例と同様、絞込みによる情報操作が出来ず、意外感のような感情表現をかもし出すこともできない。

①N = 身体器官<臉兒>

例：他在那裡把個臉兒望着榻子看詩，他那臉上的神氣連張金鳳還看不見，他心裡的事情我說書的怎麼猜的着？（29）

（彼女はそこでその顔を部屋の仕切り板に向けて詩を読んでいますので、彼女の顔の表情は金鳳さえも見る事が出来ず、彼女の心の中は、私講釈を務めます者にも測りかねます。）

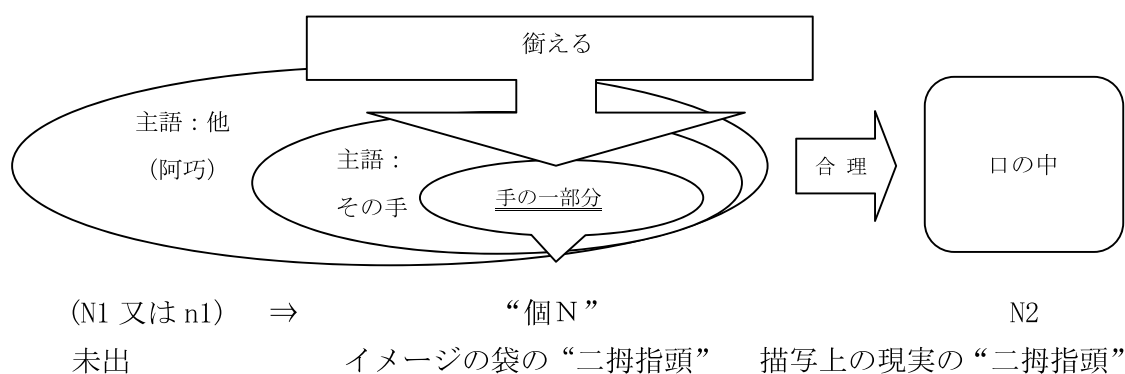


②N = 身体器官<二拇指頭>

次の例は、主語に“那隻手”が来ているので2段階で“二拇指頭”の持ち主を探すことになる。

例：張姑娘便叫道：“阿巧，進來。”他這纔越不答的躡進來，一手提攜着水壺，那隻手還把個二拇指頭擱在嘴裡刁着，嘻嘻的趑笑，遞過壺去。（37）

（金鳳が呼びました。「阿巧、お入り」彼女は、やっと諦めてのろのろと入って来ると、片手でポットをぶら下げて、もう一方の手の人差し指を口にくわえながら、にこにここと笑って、ポットを運んで行きました。）



例えば、もし、“把只二拇指頭搁在嘴里咬着”のように、指の専用の量詞を使用すると主語との帰属関係が見えなくなってしまい、誰の手なのか、分からなくなってしまうことになる。

③その他の例

<小臉兒>

例：公子道：“哟，哟！这就無怪其然你把個小臉兒繃的單皮鼓也似的了，原來爲這樁事！我勸你快快不必動這閑氣，這是夢！”(23)

(若様は、「おいおい、道理でそんなことでその顔はパンパンにふらんでいるのかい。こんなつまらないことで腹を立てるのはさっさと止めてくれ、夢のことではないか！」と言いました。)

<臉兒>

例：不由的把個紫膛色的臉蛋兒羞的小茄包兒似的，便給何小姐請了個安，又低着雙眼皮兒，笑嘻嘻的道：(34)

(おもわずその赤黒い顔が恥ずかしさで小茄子のようになり、金鳳に挨拶をすると、また臉を伏せて、にこにこ笑いながらこう言いました。)

2. 3. 2. Nが人物で、Vが感情を表す動詞の場合

“把”構文において、Nが人物で、Vが“急、嚇、樂、慌、慚、氣、羞”等その者が抱く精神や心理状態を描写する動詞である場合、処置義と致使義の両方の解釈が可能である²³。例えば、Nを施事、Vを自動詞“樂”(喜ぶ)と考え、非使役義に解釈することも可能であり、また一方で、前文における描写や状況が、Vを起こす要因と考え、Nは受事、Vは他動詞“樂”(喜ばせる)として、使役義に解釈することも可能である。ただし多くの場合、前者の方に解釈されることが多いようである²⁴。

この構文の賓語に“個”が前置された場合は、『兒女英雄伝』においては、多くが“把+個+N+V+“得”(或いは“了個”)+Cの構文形式に表れる。Nは、大半が人名で、一部人名以外の例もあるが、いずれも“公子”、“姑娘”、“縣官”と言った文の前後関係から、明ら

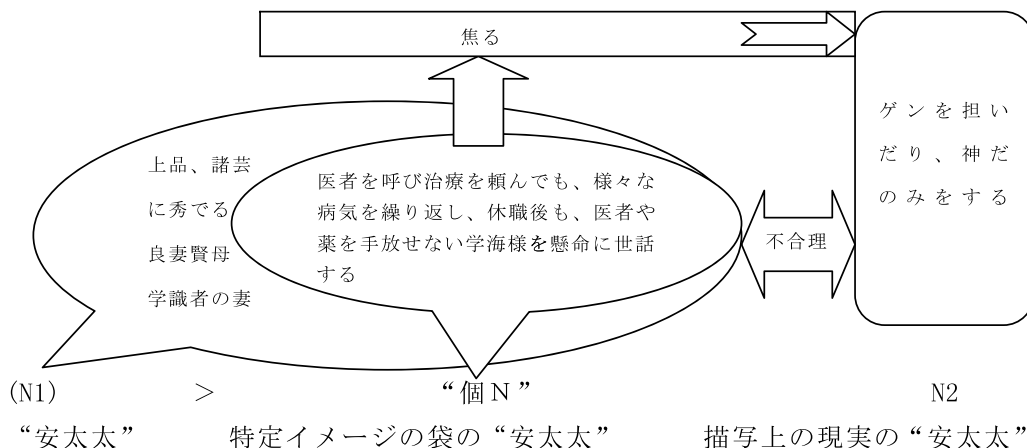
かにその場面で誰を指しているのか個人を特定できる人物である。受事、施事何れの解釈においても、Nが固有名詞の場合は、先行詞となるN1を探する必要はなく、直接Nについて人物の性質や性格、状況を情報源として特定イメージの像を作ることが出来、“個N”像とN2の状況は対照的なもので落差やギャップを感じさせる点に変わりはない。この構文の特徴は、動詞がN自身の変化を表しており、及ぼされた影響も全てNの身の上で起こる点にある。N自らがAという状態からBという状態に変化する、またはさせられることにある。ただし、“個N”について言うと、受事に解釈する場合は、これまでの例同様のプロセスであるが、施事と解釈した場合は、Nは動作の受け手ではないので、動詞に拠るNの情報に対する絞込みという方向性ではなく、Nがその動作行為を行うことを誘導するようなNの持つある情報の側面がクローズアップされることとなる。N2の状態と“個N”との対照から、それが発生するに至る背景や起こっている事態が、Nにとって、良くも悪くも尋常ではないレベルにあることを強調している。(下図の図解は、Nが施事と解釈した場合に基づく。)

①N = 人物<安太太>

例：懨懨的的就成了一箇外感内傷的病。安太太急急的請醫調治，好容易出了汗，寒熱往來，又轉了瘧疾；瘧疾纔止，又得了秋后痢疾。無法，只得在吏部遞了呈子，告假養病。每日價醫不離門，藥不離口，把個安太太急得燒子時香，吃白齋，求籤許願，鬧得寢食不安。

(1)

(気疲れから心身共に病気になってしまったようでした。安の奥様は、慌てて医者を呼び治療を頼みました。ようやく汗が出て、やや持ち直したかと思うと、今度は高熱が出たり、寒気がしたりという瘧にかかり、それがやっと治まったのもつかの間、秋の終わりの赤痢にかかってしまい、しかたなく、吏部に病気休暇の願いを出し、療養に専念することになりました。毎日、医者や薬を欠かすことが出来ません。そんな奥様は、居ても立ってもいられずに、子の刻参りをしたり、生臭を断ったり、おみくじを引いたり、願掛けをしたり、寝るのも食べるのも落ち着かないのです。)



②その他の例

<安老爺>

例：更兼工段綿長，錢糧浩大，公事紛繁，一連幾日接交代，點塚料，核庫冊，又加上安頓家眷，把個安老爺忙得茶飯無心，坐臥不定，這纔料理清楚。（2）

（受け持ち場の工事区域も広く、予算も大きく、公務は繁忙を極めて、五、六日というもの、事務引継ぎ、資材の点検、帳簿の突合せ、加えて屋敷の方の手当てと、そんな安のだんな様は、物を食べたり、おちおち眠ったりすることも出来ないありさまでした。）

<十三妹>

例：問了半天，怎奈那十三妹只管一長一短問，那張金鳳只有口裡勉強支應的分兒，却緊繃雙眉，一句話也說不出來。十三妹心中納悶，說：“妹子，你如今禍退身安，正該歡喜，怎麼倒發起怔來了？”這句話一問，那張金鳳越發臉上青黃不定，索性坐也不是，站也不是起來。把個十三妹急得，拉着他問道：“你不是嚇着了？氣着了？心裡不舒服呀？”（9）

（色々と尋ねましたが、十三妹が一つ一つ聞いているのにも関わらず、張金鳳は口の中で、気がなさそうにポツリポツリと応えるだけで、眉をしかめては、はかばかしく口を利きません。十三妹は心中訳が分からず、「どうしたのよ、もう心配事はなくなったのだから、喜んだらよいのに、そんなおかしな顔をして。」この問いかけにも、張金鳳はいつそうおかしな具合で顔色が赤くなったり青くなったりして、いても立ってもいられない様子でした。そんな十三妹は、気を揉んで彼女を引っ張りながら、「ビックリしたの、怒っているの？気分でも悪いの？」と問いかける始末でした。）

<張姑娘>

例：把個張金鳳急的又是害羞，又是要笑，只得掉過頭去。十三妹轉毫不在意，如同沒事人一般，只說了句：“你就洗了手，我也不准你動！”（9）

（そんな金鳳は慌てて恥ずかしいやらおかしいやらで、仕方なく下を向いて必死に笑いをこらえている。十三妹は、気にかけないで、勝手にしろとばかり、「手を（それで）洗うのは良いけど、（食べ物に）手をだしちゃだめよ。」と言った。）

N = 人物<安公子>

例：一夕話，把個安公子嚇得閉口無言，暗想道：“怎麼我的行藏他知道得這等詳細？”（5）

（この話に、そんな若様は口もきけぬほど驚いてしまって、内心「本当におかしな人だ。どうして私のことをこんなによく知っているのだろう」と思いました。）

2. 4. Nが動詞との間に直接施受の関係を持たない場合

2. 4. 1. Nが人物を表す名詞

Nは動詞の受け手でも動作主ではないため、Nと動詞との間に施受の関係がない用例がある²⁵。Nは、間接的に動詞による動作行為の影響を受け、その結果の状態は、補語の示す内容

によって表現されている。動詞は、いわば補語の表す状態N2を誘発する働きをしている。

このような場合、N1からの情報にプロファイルをするのは、やはり動詞が大きな役割を果たしているが、これまで挙げた例の様に、“個N”が動作行為の対象となるような直接的な働き方をするものではない。動詞の示す動作行為が起こった時点での、Nの状態に対して“個N”の情報が絞り込まれ、イメージの像が形成される。次の例の場合、動詞“穿插”「驚くような奇遇が飛び込んでくる」際の「涙」の状態がクローズアップされている。また、典型的な“和尚”の例の様に、動詞の動作行為の対象として“個N”のイメージが直接絞り込まれるタイプではないため、“個N”とN2の間に「とんでもない動作行為が行われた」という程の不合理の対立構造は際立ってはいない。勿論、矛盾は存在するが、それよりも少し弱く“個N”とN2の間にあるのは、予想外、意想外などのニュアンスである。

①N = モノ

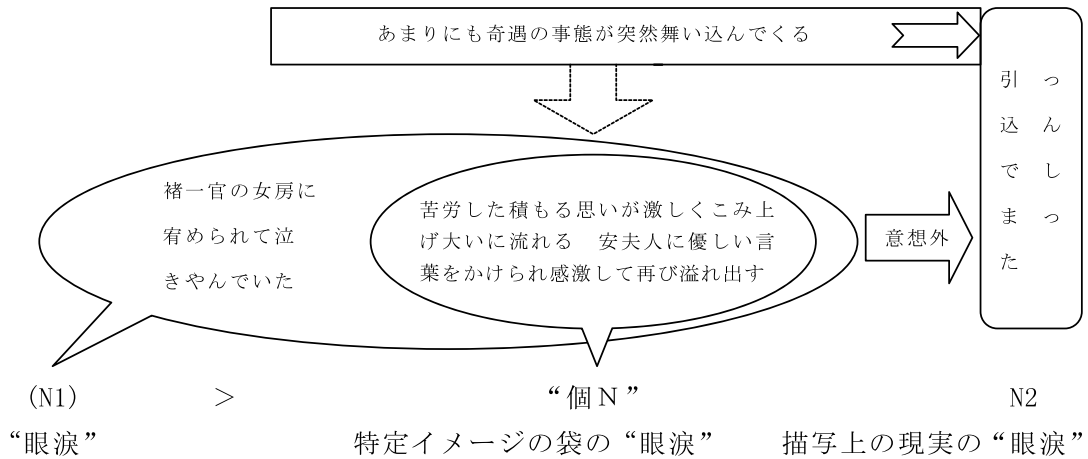
前文は次の通りである。

「他哭着閃眼一看，早見一男一女拜倒在靈前，又是兩個老少婦人跪在門裡，一個男的跪在門外，都伏在地下痛哭，又各各的身穿重孝。姑娘眼淚模糊，急切裡看不出誰是誰。口裡既不好問，心裡更想不出這是怎生一樁事。正在納悶，却見褚大娘子把靈前跪的那個穿孝的少婦攙起來，那廂那個穿孝的少年也便站起身來，還在那裡握着臉擦眼淚。那少婦便拉了褚了褚大娘子，一面哭着撲了自己來，便在方纔安太太坐的那個坐褥上跪下，嬌滴滴悲切切的叫了聲：“姐姐，你想得我好苦！”說罷，也是抱頭痛哭。（中略）」

例：及至兩個抬起頭來，兩下裡看了一眼，纔曉得是他的奶母合他的丫鬟，門外那個却是他的奶公戴勤。姑娘此時斷想不到這班人忽然在此地同時聚在一處，重得相見，更加都穿着孝服，辨認不清，到了他那個丫鬟——隨緣兒媳婦——隔了兩三年不見，身量也長成了，又開了臉，打扮得一個小媳婦子模樣，尤其意想不到，覺得詫異。這一陣穿插，倒把個姑娘的眼淚穿插回去了，默默的瞅瞅這個，看看那個，怔了半日，纔問着張金鳳道：“妹子，我難道合你們是夢中相見麼？”(20)

(そして、顔を挙げたのを見て、自分の婆やと小間使い、そして外に立っているのが爺やに、戴勤であることに、やっと気づいたのですが、この人たちがふって湧いたようにここに現れるとは夢にも思わなかったのと、皆喪服姿だったので、気がつかなかったのでした。しかも、小間使いの随縁児の嫁が二、三年会わないうちに、すっかり大人っぽくなり、女房らしくなったのに、目を見張りました。このあまりに偶然の出来事に、そんな玉鳳の涙は、引っ込んでしまって、あちらを見たり、こちらを見たり、暫くは口も利けませんでしたが、やっと、金鳳に、「私、夢をみているのではないかしら」と言ったものでした。)

“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について



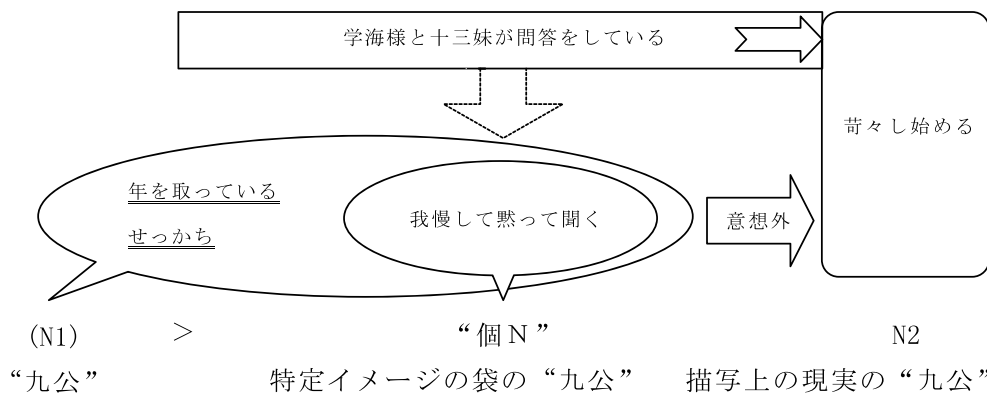
②その他の例

この例も同様に、動詞が鄧九公を直接の動作対象とするのではなく、N1の鄧九公のキャラクターを情報源として、動詞が示す問答が行われている時点での鄧九公の心情や状態に焦点が当てられている。

N = 固有名詞<鄧九公>

例：問來問去，把個鄧九公問煩了，說道：“我真沒這麼大工夫合你說話，不說罷，我又驚的慌。人家這位姑娘有殺父大仇，只因老母在堂，不曾報得。” (17)

(そんな鄧九公はというと、(学海様と十三妹の) 問答に苛々してきて、「私には、本当にあんたと話しなんかしている暇はないのだが、そうかと言って、言わないのも、むしろしゃする。……このお嬢さんには、父の仇がいるのだ。ただ、お母上がおられたために、敵討ちに行かなかったのだ。」と言いました。)



N = 人物<姑娘>

例：索性把個姑娘也鬧得迷了攢兒了，瞅瞅²⁶這個，看看那個，也不知聽那句好，問那句好。褚大娘子道：“你老人家這話不是這麼說，等我告訴他。” (19)

(そんな娘は、騒がれて益々訳が分からなくなってしまい、あっちを見たりこっちを見たり、途方にくれている。褚の女房は、「お父さん、それでは話にならないから、私からお話しましょう」と言いました。)

例：果然把個姑娘說急了，只見他拉住褚大娘子說道：“大姐姐，你聽他說的這是甚麼話！”說着，又眉稍微鬪，眼角含情，似喜似怒的向張金鳳道：(26)

(安の定、その娘(玉鳳)は、そう言われてあわててしまい、ただ彼女を見て褚の女房を引っ張り、「お姉様、こんなひどい話ってあるかしら！」と言って、うらめしそうに金鳳を睨み、更にこう言いました。)

<張金鳳>

例：“如今果然要照夢中光景撞出這等一段姻緣來，不用講，我當日救他的命也是想着他，贈金也是想着他，借弓也是想着他，偏偏的我又一時高興，無端把個張金鳳給他聯成一雙佳耦，更仿佛是我想着他纔把他配合好，好叫他周旋我。如今索興迤邐迤邐的跟了他來了！”(22)

(「それが、もし、この夢の通りに進んで、こういう縁組をするなんてことになったら、それこそ、あたしがあの時若様を助けたのも、みな若様が好きだったからということにされかねないし、お金をあげたのも若様が好きだったから、弓を貸したのも若様が好きだったからということにされかねないし、本当に一時の思いつきで、あの金鳳さんに彼と良縁を結ばせてしまったことさえもが、あたしが若様が好きだからこそあの人を若様に縁組してあげて、あの人に仲立ちしてもらおうとしたのだということになってしまい、その上、今、こうして恥も外聞も無くのこのこ付いてきたのだと思われてしまう。)」

2. 4. 2. Nが動作行為の及ぶ範囲を表す名詞

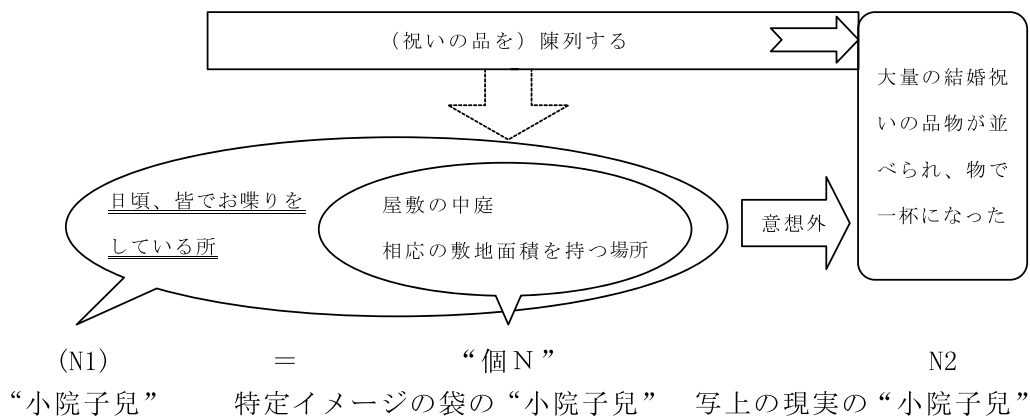
Nは、動詞の動作行為が及ぶことによって変化の生じる場所を示している。動詞にとっての対象物となる点では、他の一般的な名詞のNと同じであるが、用例は限られている。これは、“把”構文に関わる問題で、杉村(1992, p.34)では、“把”構文による場所への処置というとき、その処置の内容はというと〈天下+覆う/満ちる〉と〈破壊+出現〉が典型である」としている。実際に、『儿女英雄伝』に見られる“把個”+NのNが場所を示す用例も、「充満」の例が2例、「破壊」の例が1例である。NとN1の関係は、Nに対して相当するN1が存在する前方照応の用例である。

場所の例でも、Nの情報に対する動詞からの絞込みは行われているが、主語がNに対して取る動作行為に意思性が存在せず、物事の流れて沿ってN2の事態が自然発生する結果となっているため、これまでの例のように読み手に不合理なギャップを感じさせるような強い感情を(例えば事態発生に対する驚嘆や呆れ等)を印象付けるものではない。話し手や読み手にとって、驚くような事態が起きた描写表現とは異なり、いずれも、「主語にとってその意思とは関係なく意想外の事態が起きてしまった」ことへの話し手(作者)の感情移入の表現となっている。例えば、場所が満ちる例では、話し手である佟夫人の喜びや、作者の驚嘆の感情、また、破壊の例では作者の同情を表現している。

① 充満の例

例：“西邊的八桌便是九公合褚姑奶奶給你辦的妝奩。你瞧，把個小院子兒給擺滿了！”(27)
 (西側の八角テーブルは九公と褚の女房の送った嫁入り道具。ほら、なんとまあ、あの中庭を物が並んでいっぱいにしてしまっていますよ。)

“個N”が問題にしているのは、“小院子”自体ではなく、その「広さ」であり、最終的に強調されているのは、品物の多さである。



② その他

a. 充満の例

例：老爺只顧合世兄這一陣考据風，調，雨，順，家人們只好跟在後頭站住；再加上圍了一大圈子聽熱鬧兒的，把個天王殿穿堂門兒的要路口兒給堵住了。(38)

(学海様は、程先生と、風、調、雨、順の四天王について論じることばかりに気を取られていて、家の召使達は、後ろに立って待つしかなく、更に、周囲には野次馬がたくさん取り囲んでいて、なんとこの天王殿の入り口は、押し合いへしあいし塞がってしまいました。)

b. 破壊の例

例：這個當兒，越耗雨越不住，雨越不住水越加長，又從別人的上段工上開了個小口子，那水直串到本工的土泊岸裡，刷成了浪窩子，把個不曾奉憲查收的新工，排山也似價坍了下來。安老爺急得目瞪口呆，只得連夜稟報。(2)

(上流で誰かがやっていた工事現場が一箇所崩れ、その水がもろにこちらへ流れ下ってきて、堤にあたり、なんとこのまだ検査も済まぬ新しく作ったところは、凄まじい勢いで一挙に崩れてしまいました。学海様は、あっけにとられるばかりで、急遽報告書を出すしかありませんでした。)

2. 5. その他特殊な用法

次の例におけるN“嘔兒”には動詞“脱落”との間に施受関係のいずれも成立しない。更に直前に出てくる“嘔兒”は乳房全体を指し、“把個嘔兒”は乳首を指しており、照応するものにずれがある。例えば、提喩の表現として「ご飯食べた?」と言って「ご飯」という部分で、全体の「食事」を反映させる修辭的用法を用いた可能性も考えられるが、一方で、“嘔兒”は北京語であり、現代でも「乳首」の意味で使用されるものの、この当時は“嘔兒”に乳房全体を指す意味があった可能性も否定できない。『兒女英雄伝』においては、この単語はこれが唯一の例であるため、この一文から、提喩の表現の問題なのか、北京方言の語義の問題なのかは確定できない。

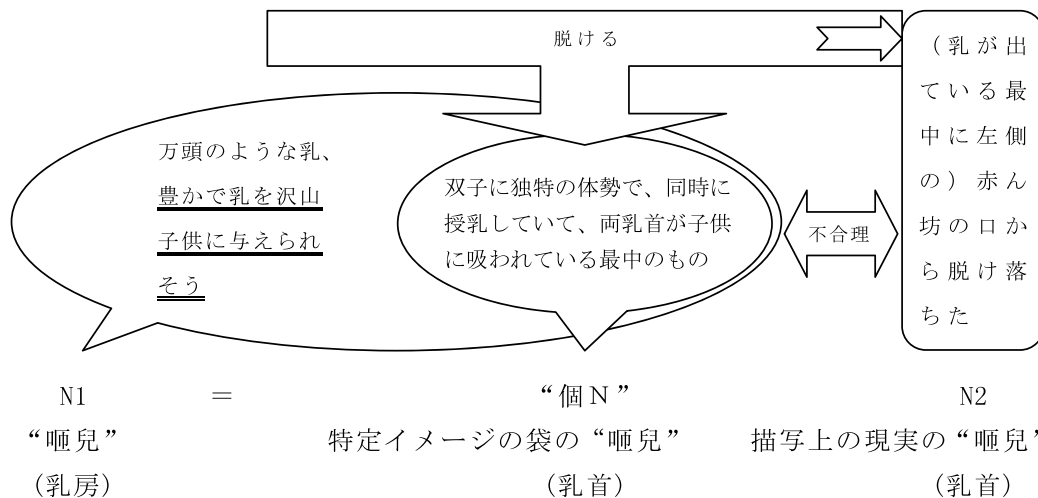
①N = “嘔兒” (N 1は乳房、Nは乳首)

例文の前段部分

「到了要倆一塊兒奶了，只解開一個脖鈕兒，一個二鈕兒這可就不行了，所以他奶起孩子來是要把裡外衣裳上的鈕子一件件都解開，大廠轆門的擦在兩邊兒去，然後纔用兩隻胳膊攏着兩個孩子，叫兩個孩子分着吃他兩個嘔兒，他却把倆孩子的四條腿兒搭成個十字架兒，兩隻手緊緊的抱着給他吃，又苦於外路人，輕易不會上炕盤腿兒，只叉着兩條腿兒，坐在炕沿兒上在那裡奶。安老爺進門兒，一眼就看見他那對鼓蓬蓬的嘔兒，他那對嘔兒，往小裡說也有斤半來重的饅頭大小，圍腰兒也不曾穿，中間兒還露着個雪白的大肚子。老爺等閒不曾開過這個眼，只慌得跼跼不安，纔得待迴避，鄧九公一把拉住說：“老弟你這有嫩綽綽了，這有甚麼的呢。”他那位姨奶奶見安老爺進來，便笑嘻嘻的說了句：“啣了不的了，他二叔來了。”」

例：待要站起來，懷裡是摟着倆孩子，纔一欠身兒，左邊兒那個孩子早把個嘔兒從嘴裡脫落出來。(39)

(立ち上がったとたんに、懷に赤ん坊がいるものだから、会釈した拍子に、左側の子供はなんとその乳首が口から脱け落ちてしまったのでした。)

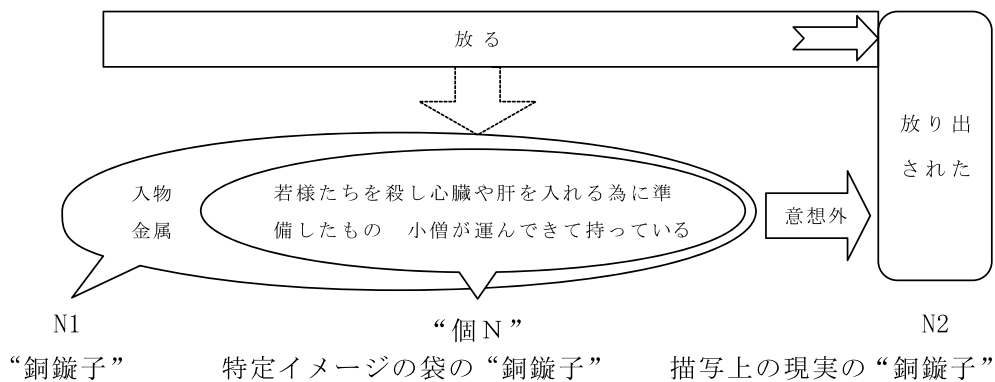


2. 6. 主語と動詞の間に意思性が無い(又は成り行き上動詞句のような事態が発生する)場合

Nは普通名詞であり、直前に先行詞のある前方照応の例である。ただし、次の例については、“個N”とN 2間での不合理やそれに伴う矛盾から「とんでもない動作行為が行われた」というギャップを読み取ることができない。その原因は、主語（省略されている場合もある）が、動作動詞に対して意思性を持っていない無意識の行動である、又は成り行き上その事態が自然発生的に生じていることにある。“個N”の認知のプロセスは、これまでの「和尚」や「キセル」の例となんら変わるところがない。ただ、主語にとってその動作行為を行うことは、本人の意識的な行為ではなく、主語の立場からすれば、予測していない動作行為である。そのため、N 2の補語や後述された動作の結果が示す事の顛末は、主語にとって、意想外の事態なのである。

例：纔一轉身，毛着腰要把那銅鑊子放在地下，好去攙他師傅。這個當兒，又是照前嘆的一聲，一個彈子從他左耳朵眼兒裏打進去，打了個過膛兒，從右耳朵眼兒裡鑽出來，一直打到東邊那個廳柱上，啣撻的一聲，打了一寸來深進去，嵌在木頭裡邊。那三兒只叫得一聲：“我的媽呀！”鐘，把個銅鑊子扔了（6）

(向きを換え、腰をかがめてその金盃を置き、親分に手を貸そうとしました。とその時、ピシッとまた一発、奴さんの左の耳に飛び込み、脳天を通り越して右の耳から出ると左側の柱にガキッ、一寸ばかりのめりこんだもので、「うわー!」と一声叫ぶと、ダーンとその金盃を投げ出しました。)



①その他の例

例：還絶絶不肯撒個謊，說：“我不識文，我不斷字。”聽得那媳婦子請教他，不由得這手舉着花兒，那手就把個籤帖兒接過來。（38）

(はやり嘯いて「私は文字など読めないのだ。」と言うことも出来ず、尋ねられて女に教えてやるため、思わず片手に花束を持ったまま、もう一方の手でそのおみくじを受け取りました。)

次のような例は現代漢語でも使用可能である。

例：一天他忽然跣着個板橙子，上櫃子去不知拿甚麼，不想一個不留神，把個板登子登翻了，咕咚一跤跌下來，就跌了個大仰爬腳子。你說怪不怪，把跨骨裁青了巴掌大的一大片，他這胎氣竟會任怎麼個兒沒怎麼個兒！（39）

（ある日、腰掛にのって、戸棚の上から何か取ろうとしたんじゃ。ところが、うっかりして、その腰掛をひっくりかえし、仰向けざまにドスンと落っこちた。不思議に思われませんか？ひっくり返って、太もも（股関節の外側）に手のひら大のあざができて青くなったのですが、意外にも、お腹の子供は大したことにならず済んだのですよ。）

3. “把 + X²⁷ + N + Vp” 構文

この構文における“個”の機能を検証するため、それ以外の量詞が入る用例と対照する。杉村（1999, p. 349-50）では、「“個”以外の量詞が入る例は、“根、块”などで、その用例は極端に少ない」²⁸とするが、『兒女英雄伝』では、状況が些か異なり、その他の量詞として、“件” 2例、“隻”：4例、“張”：2例、“條”：3例、“盃”：2例、“些”：3例、“位”：6例など20以上の用例が見ることができる。

3. 1. “個”以外の量詞の用例

(1) “件”（Nは“東西”）

① “把件東西”の例

例：他便三步兩步搶上了台堦兒，要想進屋裡看看是怎生一樁事。不想將上得台堦兒，但見個東西映着日光，霞光萬道，瑞氣千條，從門裡就沖着他懷裡飛了來了。他一時躲不及，兩隻手趕緊往懷裡一握，却是怕碰了他的肚子傷了胎氣；誰知兩手一握的這個當兒，那件東西恰好不偏不正合在他肚子上，無心中把件東西握住了。（31）

（予想外なことに、石段を上がりかけたところで、ある物体が光に照り輝きながら、色とりどりに輝く無数の光芒、瑞氣千条で、入り口の中から自分の懐めがけて飛んできました。時にこの随縁児の嫁、お腹に三月になる子供がいたもので、思わず、かばおうとして、お腹を押さえた。ところが、またうまいことに両手をおなかにやった時に、その物体が豎にも横にもならずびたりとお腹にかぶさり、自分ではその気もなかったのに、物体を両手でしっかりと押さえ込んでしまったのです。）

② “把個東西”の例

同じ名詞“東西”に対して“個”を用いる例を次に挙げる。単純に物を指す“件”の用例と比べて“個”が前述の抽象的な情報を包括してイメージ像を形成し具象化していることがよく見て取れる。

N “有詩為証”的東西”は隠喩であり、n 1は前文に出てくる“守宮砂”を指している。

例：論起他這點“守宮砂”，真是姑娘的一片孝心苦節，玉潔冰清，想着這世是無意姻緣定

了。這話除了他自己明白，平日從不曾給人看過。(中略)自己覺道：“……。如今是揚旛播鼓，弄到大家知道了，都看見了，儼然這些女眷們不論那一時、那個人提起來，都拉住手要瞧瞧希希罕兒，那時我却把個‘有詩為証’的東西，弄到‘流水落花春去也，天上人間’了。”(28)

(この「朱宮砂」とは、玉鳳の孝心と潔白のしるし、生涯独り身を通す決意の記してあったわけですが、これは自分ひとりの胸に収めていたことで、これまで人にみせたことはなかったものです。(中略)あんなに派手に見せびらかしてしまったからには、何れは誰かに見せるなんていわれるかもしれないし、そのときには、あのとき私は却って、せっかくのこれまでのいわくのある「有詩為証」の証拠の品を、『流水落花春去りゆきぬ天上人間(春は自分にはもはや手の届かない遠いかなたに去ってしまった)』にしてしまっているんですもの。)とつぶやきました。)

隠喩を用いた例で、Nが実際に示しているのは“守宮砂”に代表される覚悟の深さや節操等の抽象的な意味合いを持つもので、“把個+N”は、Nの背景やそのものに付随する性質を、Nに関する主観的なイメージとして引き出し、それを包括したモノとしてまとめる働きをしている。Nの“‘有詩為証’的東西”の先行詞n1は“守宮砂”で、“把個N”の表現したい内容は、n1“守宮砂”のもつ意味の中でも、「生涯の独身や、この印を体に入れた時の決意」などの側面を特定イメージさせる。これに対し現実におかれているN2の状況は、「今や花嫁となった状態」というギャップが表現されている。

(2) “隻”：4例

同じシーンに“把一隻手”と“把隻手”の両方が見られる場面がある。この例では、“把一隻手”は「片一方の手」、 “把隻手”は「手」を表現している。数詞“一”の有無で意味が異なる。

例：張姑娘笑得是站不住，躲到裡間屋裡，伏在炕棹兒上笑去。何小姐閃在一架穿衣鏡旁邊，笑得肚腸子疼，只把一隻手扶着鏡子，一隻手拄着肋條。(中略)張太太纔問：“咱兒咧？不是轉了腰子咧？”恰巧張姑娘忍着笑過來要合何小姐說話，見他把支手拄着肋叉窩，便問：“姐姐，不是岔了氣了？”(33)

(張金鳳はおかしくて立ってられず、奥の部屋に逃げて、オンドルの上の小机で伏せて笑っております。何玉鳳は、姿見の脇で体をよじって、お腹が痛くなるほど笑って、片方の手を鏡に添えて体を支え、片方の手をあばら骨に当てがって押さえていました。(中略)張の奥さんは、やっと「どうしたの？あなたったら、腰がねじれてしまったのではないでしょうね？」と尋ねた。折よく、張金鳳が笑いを堪えて何玉鳳に話をしようとして、彼女が手でみぞおちを押さえているのを見てすぐに尋ねました。「お姉様、わき腹が痛くなってしまったんじゃないの？」)

例：他便悄悄的“呷”了一聲，似乎覺得詫異，想道：“莫不是方纔我匆忙裡不曾把那門褪得下來？”重新探進手來摸。何小姐見這賊渾到如此，却慳上他點氣兒來了，便把那副袖箭放在地下，把手裡那根繩子雙過來，等賊的手探到鐵環子跟前，猛可的從底下往他腕子上一套，擰住了，只往下一拗，又往後一瞥，乘勢就搭在那根橫門上，左三扣右三扣的把隻手反捆在門上。(31)

(思わず、「おや？」と一声、「するとさっきは慌てて門を輪っかに引っ掛けたままできてしまったのかな？」ともう一度手を突っ込んだ。玉鳳、相手のあんまり間の抜けたやり方に腹がたってきたもので、袖箭を下におくと、相手の手が鉄の輪っかまで伸びるのを待ち構えて、ぐいとひと引き、思い切りひっぱりこんでおいて、ぐいぐいとねじり上げ、手を拾ってきた縄で門にがんじがらめに縛り付けました。)

例えば、“左三扣右三扣的把隻手反捆在門上”のこのような例で“把個手”とすることはできない。なぜなら、ここでは「手」の持つ様々な描写の中から特定のイメージの持たせた「手」を指したいのではなく直前に出てきた「手」そのものを指し示したいからである。そのため、ここでは、“把那隻手”であれば、言い換えることは可能である。“把個手”では、この場面においてイメージする手に何らかの特別な心象を要求することになってしまうため言い換えは出来ない。

(3) “張”：2例

例：只見他從頭至尾看了一遍，擱在桌兒上，把張一團青白煞氣的臉，漸漸的紅暈過來，兩手扶了膝蓋兒，目不轉睛的怔着望了他母親那口靈，良久良久，默然不語。(18)

(それに丹念に目を通してテーブルに置いたかと思うと、それまで蒼白だった顔に次第に血を上らせて、両手を膝についたまま母親の柩をまじろぎもせずに見入りました。)

“把個”、“把那個”のように、この例を“張”以外の量詞に入れ替えることはできない。“把那張”には言い換えが可能である。“把一張……”は、「その人の顔の一面」という意味になり、やはり言い換えは出来ない。

(4) “條”：3例

例：愁的是這姑娘好容易把條冷腸子熱過來了，這一左性，可怕又左出個岔兒來。(22)

(心配したのは、玉鳳がまたしても意固地な心を蒸し返されたら、このつむじ曲がり、また惨事になりかねないということです。)

例：及至何玉鳳見安老爺、安太太命公子穿孝扶靈，心中却有老大的過不去，纔把張冰冷的面孔放和了些，把條鐵硬的腸子迴暖了些。(23)

(玉鳳は、学海様、奥様が若様に喪服を着て靈柩を守って葬送するよう命じたのを目にし、心中、お殿様に恐縮し、凍てつくような面構えは幾分緩み、その鋼鉄のような心も幾分溶けてきました。)

例：説着，一路低着腦袋來到他屋裡，抓了個小枕頭兒，支着耳跟台子躺下，只把條小手中兒蓋了臉，暗暗的垂淚²⁹。(40)

(とぼとぼと自分の部屋に戻ると、小さな枕を耳の下に宛がって横になり、手拭を顔の上に広げて涙にむせていたのでございました。)

(5) “盪”：2例

例：那等熱天，他會把盪滾開的薑湯唏溜下去竟不怎的不算外，(37)

(そんな暑い日、熱々の生姜湯をすすり飲んでも、なんとも無いだけではありません。)

(6) “位”：6例

“位”の後ろに来るのは、基本的に全て固有名詞³⁰である。“安太太、安老爺、舅太太、何小姐”等の例が見られるが、これらの固有名詞は“把位N”、“把個N”、“把N”の三種類の用法が、場面によって巧みに使い分けられている。“把個N”にはこれまで述べたような特別な意味があり、“把位N”と“把N”はいずれも人を表すだけで機能上の違いはないが、量詞の性質上、“把位N”の方が丁寧な敬意を払った印象を与える。

例：緊接着就有内城各家親友看了榜先遣人來道喜，把位安太太忙得頭臉也不曾好生梳洗得。(1)

(慌しく城内の親戚や友人が発表を見て人をお祝いによこすので、奥様は忙しくて、頭や顔を手入れする暇もありません。)

(7) “些”：4例

例：天尊道：“這‘兒女英雄’四個字，如今世上人大半把他看成兩種人、兩樁事：悞把些使氣角力、好勇鬪狠的認作英雄，又把些調脂弄粉、斷袖餘桃的認作兒女。(0)

(帝釈天いわく「これ、兒女英雄という言葉、今、俗界ではたいていのものが、これを全く別の人間、全く別の事柄のように考えて、やたらと気概を力比べし、勇敢さを激しく争うようなそういう者どもを英雄だと、また、脂粉の香や稚兒遊びにうつつを抜かすそういう者どもを兒女だと思い込んでおる。』)

例：把些粗重傢伙并罈子裡的鹹菜，鋼裡的米，養的雞鴨，還有積下的幾十串錢，都散給看門的莊客長工合近村平日常侍他母親的那些婦女；(17)

(残った大きな家具、亀に漬けたままになっている漬物だの、米、鶏や家鴨、かねてから蓄えてあった穴あき銭などそれら全部を、作男や母親の面倒を見てもらっていた村の女たちに分け与えたのでした。)

不定量詞“些”は、「賓語として挙げた複数の物」を指してそれを総括している³¹。

例：叫了許多家丁把些兵器搬來，趁那新月微光，使了一回拳，又扎一回桿子，再合那些家丁們比試了一番，一個個都沒有勝得他的。(18)

(若党たちに命じて、全ての得物を運び出させると、三ヶ月の薄明かりの中で、拳法の形と棒術の形を一通り披露してから、若党たちを相手に何番か手合わせさせましたが、誰一人かなうものはいませんでした。)

3. 2. “把+「量詞」+N+Vp”構文における“個”とその他の量詞

“個”以外の量詞の場合、「物自体」、「事柄自体」に重点があり、前文に照応する先行詞N1に対して、客観的に物質として全く同じ「もの」を指し示している。この点において、“把+X+N”とN1との関係は典型的な前方照応といえる。また、これらの例文では、“個”の前に“一”を前置すると意味が変わってしまうため、単純に“一”の省略と見ることはできない。

ここで、量詞としての働きを考えてみたい。量詞の役割について、「量詞の個体化機能」の中で大河内(1985, p.1)は次のように説明している。「量詞は陪伴詞、範詞、類別詞などとよばれてきた。その名の示すごとく名詞についてそれぞれの範疇意義を明らかにするものとされ、ある名詞に量詞がつくというのは、その範疇で物を捉えているということであり、ある名詞に量詞が定まっているというのはその物の認知の仕方が、社会的、伝統的なものだとすることを示すものであった。そして時々上の例³²のように、話し手個人のその時、その場所での認知の量詞をかえることによって顕示できたのである。(中略)要するに、物の認知には、常にその語の語彙の意味の外に、主体的に捕われるべき領域が広がっていて、文法とはこれとかかわらなければならないのである。」このように、量詞は、独立した「もの」として存在を確立させる役割があると考えられる。更に、大河内(1985, p.7)によると、日本語の「この」や英語の“this”のように直接名詞を修飾出来ない理由は、中国語の名詞の特性にあるという。「類名や総称である名詞は単体ではない。ある種の抽象のなかにある。これを具体的世界の「もの」にかえるのが〈一个〉³³の働きであり、その働きを経て、あれこれの指示が可能な「もの」となる。」とし、更に「中国語の名詞は非加算であり、量詞を付すことで可算的になるということである。」としている。

では、“把+「量詞」+N+Vp”構文における“個”の役割とその他の量詞の違いは何処にあるのだろうか。これまで見てきた用例から、其々の働きを整理してみる。ここで言う「個」とは、数をカウントする際に使用する性質のものではない。“個”は、明確な定型の無いものに対して、独立した「個」を形成するための変形自在な袋の如き型に入れて、イメージに合わせた像を作るようなものである。ここで言う定型のない対象とは、対象に関する情報の集積であり、それを“個”という型(袋)に入れることによって、ひとつのまとまりのある「個」として扱うことができるようになると考えられる。いわば、“個”は名詞の持つ概念が入れられる空の入れ物(つまり空箱)と認識され、そのため、“個”があると、人は、無意識にその箱に入るべき情報があることを感知する。“個”の入れ物(箱)に情報の集積したものを収めることで、概念化し初めてその名詞は独立したひとつの固有の「具象物」として

扱えるようになるのである。一方、一般の量詞は、物体その物を模るものである。其々の名詞に合わせて詠えられた一種の雛形のような型であり、対象が収まるのに調度良い形状の型が其々の名詞に合わせて提供されており、そこに対象がきちんと嵌まることで、「個」として完全に独立することが可能となる。対象物に固体としての形があるものは、適合する型に嵌まった形で捉えられ、固体としての形状がないものは、量詞をひとつの型として嵌めこむことで、個々の固形として看做すことが出来るようになる。その意味では、一般の量詞には、名詞を認識する際の形状を把握するための範囲を決定する効力があると言える。(こうした例は、固体で捉えにくいものに借用量詞を用いる例だけでなく、例えば、固形物でも「瓦」を“块”(一枚)と数えるか、“一溜”(一並び)と数えるかなどの違いも関係する)。

要するに、“個”は、目に見えない情報を集約した認知の像を個体として、「具象的」に認識するための単位としての働きがあり、一般の量詞は、物質その物を固体としてつまり物体として、「物象的」に認識するための単位である。

4. “把+“一”+「量詞」+N+Vp”構文

更に、数詞との関係を確認するため、“一”が量詞に前置する場合の例を見る。

4. 1. “把+一个+N+Vp”構文

『儿女英雄伝』においては、“把+一个+N+Vp”の例は2例しか見当たらない。“一個N”は、「その範囲～というものを一つ丸々(全部)」を指し、いずれもある物事全体をひとまとまりのものとして括る作用を持つ。

4. 1. 1. Nが抽象的な事物を指す名詞

例：因見張姑娘是個聰明絕頂的佳人，安公子又是個才貌無雙的子弟，自己便輕輕的把一個月下老人的沉重就在身上，要給他二人聯成這段良緣。(10)

(張家の娘は聡明で絶世の美女であり、安家の若様もまた才能と容貌の両方を兼ね備えた青年であったので、自分がそっと媒酌人としての重責というものを全てを担って彼ら2人のこの良縁を結んでやりたいと思ったのでした。)

4. 1. 2. Nが定型が不明瞭で範囲が限定しにくい名詞

例：當下便把安老爺同公子挪到大廳西耳房住，讓安太太婆媳同玉鳳姑娘住了東院，連張老夫也請了來，併一應車輛行李都跟過來，打算將來就從此地起身。幸喜得他家莊上有個大馬圈，另開車門，出入方便。登時把一個鄧家東莊又弄成個“褚家老店”。(21)

(すぐさま、安のだんな様と若様は大広間に移って西側の部屋に住み、安家の嫁姑と玉鳳は東院に住み、張夫婦も呼んで、すべての車や荷物も着き従って、ここから出発する予定です。幸いなことに、彼の莊園に大きな厩があり、他に車馬の通用門を開けたので、出入りには便利でした。たちどころに、鄭家の東の莊園なるもの全体が、また「老舗褚

家」となっていました。)

4. 2. “把+一+X+N+Vp”構文

『兒女英雄伝』中の“把+一+X+N+Vp”構文には、“把一番”、“把一段”、“把一條”、“把一碗”、“把一溜”、“把一隻”等の用法の他に、特殊な量詞³⁴として、“把一肚子話”、“把一臉”、“把一腔”(計12例)もある。これに対して“把+X+N+Vp”構文は(23例)である。先の“把一個”の2例を含めて、『兒女英雄伝』全体の状況を見ると、量詞が何であるかにかかわらず“一”のない“把+量詞+N”(120例)の形式の方が、遥かに“把+一+量詞+N”(14例)の形式よりも多く用いられていることが分かる。これは、杉村(1999, p. 348)の現代漢語における研究で、“一”のある形式の方が優勢であるとする状況³⁵と逆転している。

4. 2. 1. Nが抽象的な事物を指す名詞

ここでのNは、“重耽”、“好事、大案、風腸、話、腸子、怒容、怒气”等があり、「事、話、感情」を意味するものである。“把+一+X+N”は、Nを実体のあるひとつの事柄として数え、「その範囲の～というものをひとつ丸々(全部)」という意味を表している。

① “番”：1例

例：捏着兩把汗，只恐把一番好事變作一片戰場，打將起來。(28)

(せっかくのお祝い事の何もかもが一転修羅場になり、今にもチャンチャンバラバラが始まるのではないかと手に汗握っておりました。)

② “樁”：1例

例：把一樁驚風駭浪的大案，辦得來雲過天空！(11)

(おどろおどろしい大事件の全てが、きれいさっぱりと片付いてしまったのです。)

③ “段”：1例

例：他登時把一段剛腸化作柔腸，一腔俠氣融成和氣。(19)

(たちどころに態度や心の諸々がたちまちほぐれ、満腔の意地を張る気持ちもなくなりました。)

④ “条”：1例

例：霎時把一條冰冷的腸子汨了個滾熱，(20)

(この時は辛い思いというものの全てが一時に熱くこみ上げてきました。)(“一”は省略可能)

以下は、特殊な量詞(数詞を一以外のものに入れ替えることが出来ない)

⑤ “肚子”：2例

例：鄧九公此時是把一肚子的話都倒出來了，(20)

(鄧九公は、腹のうちを何もかもぶちまけました。)

⑥ “臉”：1例

例：他便把一臉怒容強變作一團冷笑，(25)

(彼女は、怒りの色というものを抑えて、作り笑いを浮かべました。)

⑦ “腔”：2例

例：早把一腔怒氣撇在九霄雲外，

(腹立たしさというものなどは、とうの昔に忘れてしまいました。)

4. 2. 2. Nが定型や範囲が不明瞭で限定しにくい名詞

量詞によってNの一定の範囲を示すことで、その場での定まった形、範囲を限定している。借用量詞などはこれに当たる。「その範囲～というものをひとつ丸々(全部)」という意味を表す。これは、“把+一+個+N”のNがひとつの固体としての形を持たない名詞の例(“把一个鄧家東莊”)と同じ意味機能である。

量詞“碗”：1例

例：安老爺却就着那五樣佳肴，把一碗麪忒兒嚙忒兒嚙吃了個乾淨，(28)

(けれども学海様は、五種類のおかずと一緒に、一杯のうどんを全部ツルツルときれいにたいらげました。)

4. 2. 3. Nが形状と単位が明確な名詞

“溜、隻”の例があり、量詞に後置されるNは、“檐瓦、手”などの可算名詞が後置され、「ひとつの、一方の」のような一の数を表す単位としての用法である。

量詞“隻”：1例

例：只把一隻手扶着鏡子，一隻手拄着肋條。(33)

(一方の手を鏡に添えて支えにし、もう一方の手をあばら骨にあてて支えていました。)

量詞“溜”：1例

例：又把一溜簷瓦帶下來，唏溜嘩啦鬧了半院子，(31)

(ひと並びの瓦をガラガラと蹴落とす始末でした。)

以上をまとめると、“把+一+個+N+Vp”構文では「その範囲～というものをひとつ丸々(全部)」、 “把+一+X+N+Vp”構文の意味も、基本的には、「その範囲～というものをひとつ丸々(全部)」という意味であり、形状や単位が明確な名詞については、「ひとつの」数を表す単位として使われている。つまり、“一”が量詞の前に置かれている場合、量詞の種類よ

りも、あくまでも“一”の存在に意義があり、量詞は、限定する範囲を決定し、ひとつの可算可能な個体とするための単位として機能している。

5. “把+個+N+Vp”構文の機能に関する分析

5. 1. “個”の機能とは

これまで本論では、“個”の機能は、「Nのイメージ、つまりNへの複数の認知情報を像としてまとめあげ、全体的にひとつの認識可能な概念として存在をくり出すこと」にあるのではないかと考えてきた。これは、大河内（1985, p.6）の言う「“一個”はいわば名詞の属性表示機能、つまり、類名や総称というものを特定の個体にまとめ上げる働きをしているのである。Unityの表示、individualizerといえる」という考え方と、ひとつにまとめるという観念上一致するものである。実際、現代漢語に関する研究から既に論じられている“個”の機能は、目的語の属性を表す「属性表示機能」に集約されるものが多い³⁶。「属性」とは、「そのものの有する特徴・性質」³⁷を指しており、Nに関する様々な情報というものが、固有の性質から来るものだとすると、本論での“把個N”に対する「Nへの複数の認知情報を基にプロファイルされた一つのイメージの像」という解釈も、属性の一つと呼ぶことは可能である。しかし、土井（2000, p.32）にも指摘があるように大河内（1985）では、“一個”と“個”の区別が言明されておらず、更には、「属性表示機能」という表現が極めて抽象的で、その意味範疇が広く実質的な解釈の絞込みが難しい。そのため、土井（2000）に指摘される“把個N”に関する「属性」と、ここで考える機能の解釈とは、どこか合致していないように思われる。

5. 1. 1. 先行研究における解釈

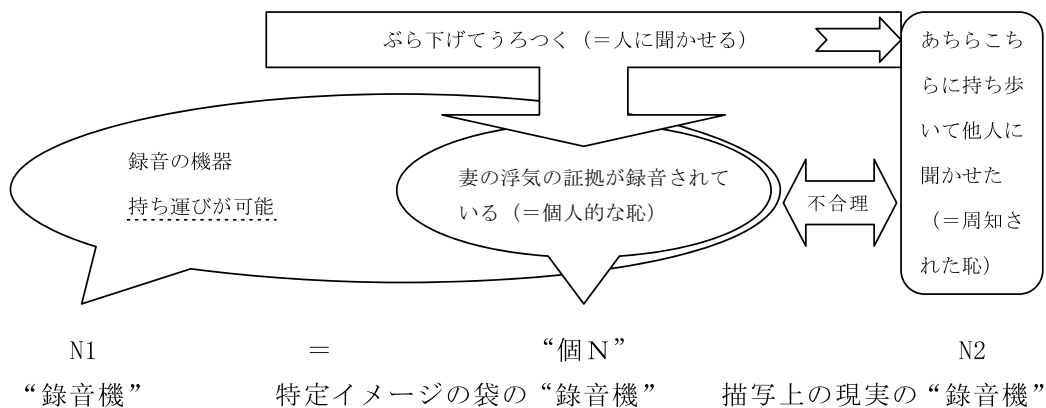
土井（2000, p.39）では、次の例を挙げ解説する。「“何同礼听完了录音带便皱眉头：“喂喂，你把录音机收起来，拎回去。你怎么老是公私不分，把家务事拿到厂里来噜里不苏。堂堂八尺男子汉，连个老婆也管不住，还有脸把個录音机拎来拎去！”初め“录音机”は眼前にあるテープレコーダーを直指しているが、二番目の“录音机”は文脈から眼前にあるテープレコーダーを直指しているとは言いがたい。もし“個”がなければ、テープレコーダー全体を表す総称であると考えられる。また仮に、専用量詞“架”“台”が用いられるならば、それは上述したように、専用量詞には属性からその存在を表示する機能が希薄なために、“把一XN”から“一”を取った省略形と変わらなくなるであろう。“個”の附加によって、“录音机”は『録音テープを再生し聴くもの』という属性からその存在が示されている。それなのに、そのテープレコーダーを持ち歩いて、かみさんの浮気現場を捉えたテープを上司に聞かせようとする人間に対して、話し手の皮肉が一層強められていると考えられる。」（中略）また、「“個”は眼前に存在する直接指示できるものにも附加されることがある。“把個+モノ”の述語は多くが、モノの破壊、附着、位置移動を表すが、これらの動詞は、その動作効果が直接モノに及ぶタイプのものである。動作が眼前のモノに対して直接働きかけられるとき、そのモノの属性にはあまり注意が向かない。そこで、そのモノの属性を喚起させ「ほかでもな

くそのモノを」という強調の意を込められたのが、「把個」+モノ」の“個”といえるのではないだろうか。そうであればこそ、杉村（1999）が指摘した、話者の『Nに対する思い入れ』が込められ、そのNが出くわす『事態の意外な展開』に話者の驚きが表現されるのである」。以上原文ママ)

5. 1. 2. 「属性」の意味するところ

この“録音機”の例は、先行詞N1にNが前方照応する場合の例である。同様のタイプの用例としては、『兒女英雄伝』の“和尚”や“烟袋”の例が挙げられる。“個”は、その他の量詞同様、後ろに続く名詞Nを、「ひとつのまとまり有るモノとして示す」機能を備えているという理解には差異はない。しかし、本論との解釈が大きく異なるのは次の点である。土井氏は、「録音機」に対するそのモノの属性を喚起させる内容とは『録音テープを再生し聴くもの』を意味する」としているが、さきの“把個烟袋”などの例で“個”が包括していると考えられるのは、このような物質としての基底に関わる属性の強調されたものではなく、コンテキストの“烟袋”に関する具体的な描写や説明から得た認識と、社会的な一般常識、更にこの小説の中の別の場面での“烟袋”のあり方から、普遍的な認識が刷り込まれているものに対して、構文の文意（特に動詞を含む述部）に拠って焦点の絞り込まれた情報の融合体のイメージの像ではないかと考える。特にここでの“録音機”は、一種の換喩表現で、内々は「妻の浮気という個人的な恥」を指している。

本論での解釈によれば、現実の描写であるN2に相当するのは、「あちらこちらに持ち歩いて他人に聞かせた（＝周知された恥）」であり、動詞句「ぶら下げてうろつく（＝人に聞かせる）」によって、テープレコーダーの情報はプロフィールされて焦点が絞り込まれ、“個N”として、「妻の浮気の証拠が録音されているもの（＝個人の恥）」という性質が際立たされたイメージが想定される。



「属性」というとその物の持っている性質全般を広く指してしまうため、このような理解のずれが生じてしまうのだろう。もしも、本論での“把個N”に対する考え方に、「属性」という表現を敢えてそのまま使うなら、「コンテキスト等によって提示された属性のうち、話題の

焦点となっているプロフィールされた特徴的な属性をカテゴリー化する働きを持つもの」ということになる。

5. 2. “把”構文の賓語の性質

Nは、認知される時点に動作の最中後という差異があるとしても³⁸、“把”構文の叙述が終了した段階では、「双方向から共通の認知がなされる対象物」として存在しなければならない。英語でいう定冠詞theがつく名詞の性質は、“把”構文中のNに要求されるこの条件によく似ている。theの働きについて、田中（2007, p. 43-44）は、「theは情報共有のしるしであり、示した対象を相手（聞き手、読み手）が自分で特定できると想定する場合に使う」としている。「theが使えるかどうかは、相手次第で、話し手は対象が何であるか分かっている、相手がそれを分からなければ、theを使うことはできない。対象がどれであるかをお互いに理解できるという共有感覚があれば、theを使うことが出来る。共有感覚には、三通り可能性が考えられる。①常識的共有：常識的共有というのは、ある集団で常識とされていることを前提に、相手も対象を特定可能であろうという想定を立てる場合。②文脈的共有：既にふれた対象とこれから説明する対象がある。a. 既に触れた対象を取り上げる。b. その対象がどのようなものであるかこれから説明する場合。③指示的共有：何かを表すことで相手と対象を共有することを可能にする場合がある。つまりtheは、相手とのコミュニケーションという枠組みの中で捉える必要がある。theを使うかどうかの決め手は、相手にわかる範囲（相手の参照枠：frame of reference）の中で対象を「あれだ [それだ]」と特定できるかどうかである。」と解説している。確かに、“把”構文中のNにおいても、上記の①常識、②文脈、③指示³⁹のいずれかで、話し手と聞き手の間に、一致する像が結ばれている必要がある。“個”の存在によって、まとめられたイメージの想像に、“把”構文におけるNの双方向の認知の合致という性質を活用することにより、話し手と聞き手の間で、特定イメージの像を共有するという一体感を持たせる効果が生じる。

一方、一般的な動賓構造の（“S + V + O”構文）におけるNには、このような話し手、聞き手、双方の特定イメージの合致は強要されない。大河内（1985, pp. 5-6）に“S + V + O”構文の賓語に“個”が前置された例文と解説がある。「次の例のように〈警官〉のような名詞だと：11. “这儿有警察吗？”、12. “这儿有个警察吗？” 11のような〈一个〉のない文が日常的問いになる。求められるのは、警官であれば誰でもよく、特定の警官を問題にしているわけではないからである。（中略）二文の主たる使い分けは、誰彼を問わない警官と、特定個人に収斂する警官との違いにある。後述するように、12の〈警官〉は、indefinite（definiteに対して）ではあるが、specific（non-specificに対して）な名詞と理解されなければならないであろう。聞き手との関係においては、任意なのだが、話し手の意識のなかには目指すものがある。」このように、一般的な動賓構造では、“個”があっても相手にはNに対する同一のイメージを持つことは要求されておらず、話し手と聞き手の間で、Nが何たるかその存在を確認し、特定イメージを想像して共通の像を結ばなければならないという必然性は生じない。

更に、大河内（1985, p. 6）は、固有名詞に〈一个〉が付くケースを取り上げる。「イエス

ペルセンは、新聞ではじめて名前を知った人物が次第に「知った人」になるのはその人物がくり返され、知識が増すことによってであるという過程を指摘しているが、固有名詞は知らない人にとっては、何の属性も内容も喚起しないが、親しい人にとっては普通名詞と比較にならない内包豊かな語である。しかし、そのいずれの場合においても、名前は属性の一として、〈一个〉を付して、人や物を属性から表示するのである。〈中国出了个毛泽东〉とは、その親しい人の場合であろう。日本語でいえば、「呂叔湘トイウ人ヲ知ッテイマスカ?」「ドウイウ人デスカ?」である。「誰デスカ?」ではない。受け答えともに内包目あてである」。

ただ、“把”構文に用いられた“個”の場合は、確実に双方向に共通する内包である必要がある。「ドウイウ人デスカ?」というような回答は成立しえない。『児女英雄伝』を始め明、清代の白話資料の“把個”構文においては、Nが固有名詞の用例が、特に多く見られる⁴⁰。先のイエスペルセンの表現を借りれば、小説の読者は、ストーリーを読み進めるうちに、登場人物に関する情報が増え〜トイウ「知った人」になるわけで、この構文が評書（講談物）の章回小説である『児女英雄伝』に格段に多く見られる理由は、この辺りにもあるのだろう。

以上のように、“把+個+N”という構文を見たとき、読み手は、「話し手の中にNに対する特別なイメージの想定があって、この構文を採用しているのであり、それはこちら側にも特別なイメージとして共通認識できる筈である」と直感する。だから、反対にNに対して、叙述から特別なイメージを絞り込むことが出来ない場合には、“把+個+N”の構文自体に不自然さを感じる事となる。例えば、次のような状況下では、一般に“把+個+N”の構文は使うことができない。例a：“把孩子生在医院里。”「子供を病院で生む」という社会常識が一般的に存在する認識下では、特殊な状況にでも置かれていない限り、普通、例b：“把個孩子生在医院里。”「なんとこともあろうに子供を病院で生む」と言うことは出来ないのである。つまり、“個N”が表現するものは極めて主観的な心象によるものであっても構わないが、“把個N”となると客観性を持った心象が必要となるのである。

5. 3. “把”構文の賓語と“個”

“個”の働きは、Nのイメージ像に、袋をかけるようなものと述べたが、つまり、これは、イメージによるカテゴリー化である。Nを単なる物としてではなく、その物の持つ概念をカテゴリーとして一つに捉えるということであり、袋はNの認知されたカテゴリーを包み込む外枠のような役割をしていると考える。この中に、コンテキストや社会的常識に基づいたNに関する知識や認識から、必要情報が収集されて包括され、“個”という枠に包まれることによって、初めて抽象的な形状の無いものが個として存在できるようになる。

“把”構文の賓語は、双方向の共通認識が必要となるため、基本的に必ずその物に関する情報が文中、若しくは意識の中に存在することが前提となる。そしてNに対して、常にどのようなNか認識するための情報収集、つまり照応が行われることになるのだから、“個”の付加によって単純に対象物を選定するのではなく、情報を収集してイメージをカテゴリー化する必要がでてくる。この場合、先行詞が存在する場合もあるし、存在しない場合もあるが、背景にある情報源となるのは、(1)社会・文化的な共通の概念に基づくもの、(2)小説の前文の描

写・説明によりイメージとして作り上げられ、又は刷り込まれた概念に基づくものの両方によって形成されている。これは、言語全体の認知に関わるベース「認知モデル (cognitivemodel)」や「文化モデル (culturalmodel)」⁴¹と同じものを指している。更に、叙述と絞込みとN2との対照によるは、一種のフレーム⁴²に相当する機能である。つまり、「“把個”は、読み手が持つ情報の中から、構文の文意（特に動詞を含む述部）によって焦点化した構文の文意が求めるNのイメージを脳裏に鮮明に想起させ、概念としての輪郭（アウトライン）を描き出す役割を担っている。」という理解は、認知モデル・文化モデルの情報から、フレームによって、プロファイルされたカテゴリーを形成するという一般的な認知能力のプロセスに完全に投影することが可能である。

5. 4. “把個N”のもつ指示性

最後に、照応関係の観点からこれまでの問題を考えてみると、“把個N”は「照応表現」、照応表現が指示する対象Nは「指示対象」、先行文脈中に明示的に存在し照応表現の指示対象を文脈の中に導入する基になったN1は「先行表現」ということになる。安公子が十三妹（玉鳳）に吊り上げられた例を挙げると、照応表現“把個N”は、「あの安公子」、指示対象Nは、「成人男性としての体格を持つ安公子」、先行表現N1は「固有名詞として様々なキャラクターを持つ安公子」ということになる。そもそも、照応関係における照応表現の例として代表的なものは代名詞であるのだが、“把個N”にも、「あの安公子」のように、指示対象Nに対してあたかも指示機能があるかのような働きが見られる。

ここで、指示性の本質とは何かを考えてみたい。以下は、三浦（1972, pp. 117-118）における日本語の代名詞の指示性に関する解説である。「代名詞とよばれるものは、名詞のように実体を取りあげるのではなく、いま見たように関係（会話という人間関係の構造を指している）をふまえている。認知理論的に言うならば、「名詞」は、「実体」それ自体を取りあげるのに対して、「代名詞」はたとえ同じ実体を対象にしても、実体それ自体に焦点があるのではないから、実体はきわめて抽象的に「実体一般」として取りあげるにすぎない。それゆえ、実体の特殊性すなわち差異を超えて同じ「代名詞」で表現できるのである。（中略）「代名詞」は「指示」「表す」語として説明されてきた。だが、「代名詞」が「名詞」に代わって使われるということは、両者に差異だけでなく、共通点がありこの共通点を媒介として代わるのだということを暗示する。したがって両者の過程的構造を検討し、差異と共通点とを明らかにしなければならない。とりあげかたはちがっても対象に共通点のあることを明確にし、「表す」という「代名詞」の特殊性を取りあげたかたの差異として本質的に把握しなければならない。

例えば、日本語でも、“把個”と同じような機能を活用したギャップを強調する表現がある。「あの」という指示詞⁴³を活用した強調方法である。例：「昨日、高校の同級生だったA君と食事したら、あのA君が、特上うなぎをおごってくれたんだよ。」つまり、「あのA君」（“把個N”に相当）は、「特上うなぎをおごってくれたA君」（N2に相当）と対照されており、N2の状況を「気前の良いA君」とするなら、その引き合いに出す「あのA君」（“把個N”）

は、「お金を使いたがらないしまりやのA君」となる。つまり、「あのA君」（“把個N”）が「あの」と指示対象にしているのは、「人格のある側面がプロフィールされカテゴリー化されたA君」であり、この先行詞N1は、「高校の同級生A君」である。まさに“把個”を使用した安公子の例と同様の論理の展開が見られる。しかしながら、“把個+N”は代名詞ではない。それなのに、これに似た理屈が“把個”とNとの間にも見ることが出来、あたかも指示性的のように機能するのは何故だろうか。

代名詞は、指している名詞の実物と全く同じものを言い表しているわけではない。例えば、諜だけで「本棚からあの本取って。」と頼まれた場合、聞き手は「あの本」という言葉から、自分（この場合は目今）にある情報の中で、依頼者が「あの本」と言ったモノに対して、まず、①相手も自分も情報を共有しており認定可能な状態にあるものであると考える、②そこでコンテキストや眼前の状況から情報を集めて絞り込み、その本のイメージを纏め上げた結果、ある限定されたモノとして認知する、③そのモノの認知と最も適合する物体を「あの本」に相当するものとして決定付ける、という工程を頭の中で行っている。これは、①が、話者と聞き手の双方が認識可能なものでなければならない“把”の賓語への機能に相当し、また、②③が、聞き手に一種のイメージ化を図らせて、そのイメージ化したものをモノとして認知する“個”の機能に相当しており、“把個+N”構文が、指示によるモノを認知するプロセスと、ほぼ同様の過程で文意が理解されていることに由来する。

5. 5. まとめ

『児女英雄伝』の“把+個+N+Vp”構文の基本的な機能をまとめる。

先行詞との照応関係⁴⁴、Nの名詞の種類、更に動詞との関係によって次の意味機能に分類される。

N1、n1が存在するNの場合

①文意（特に動詞を含む述部）のプロファイルによる「焦点カテゴリー化」

N1、n1が存在しないNの場合

②常識的な背景から誘導される推論による「特定カテゴリー化」

③抽象的内容について文脈から情報が概略化された「具象カテゴリー化」

④主語の身体部位と看做される「帰属カテゴリー化」

其々の機能は、次のようなものである。

(1)動詞に拠る認知情報の「焦点カテゴリー化」

Nが普通名詞の場合、カテゴリーのプロトタイプを比喩としてNに用いるなどいくつかの技巧も見られた。話題として取り上げられ、プロフィール化された内容が、“把個N”による認知カテゴリーを形成する。また、Nが固有名詞の場合も多くみられた。プロフィールに際し、修飾語などによって更なる絞込みが行われることもある。

(2) 叙述された特徴から特定のものに限定する「特定カテゴリー化」

Nが受事の場合にみられ、初出のNに対して、コンテキストや叙述から、その特徴を絞り込みどのような性質を持った物なのかを特定する。

(3) コンテキストからの認知情報を総括化し全体を示す「具象カテゴリー化」

Nが抽象的な名詞の場合にみられ、一つの抽象的概念に対して、スキーマによって総体的な一つの事物として包括する働きがある。

(4) 直前の主語である人物に認知情報の繋がりを求め所属を示す「帰属カテゴリー化」

Nが当事者であり、身体部位の名詞の例がこれに当たる。主体（主語として示されない場合もある）に対して、Nはその一部である身体部位を表し、所有格を持つような指示性によって帰属関係を示している。

6. 修辭的用法

『兒女英雄伝』においては、このような“個”の機能と“把～”構文のNに求められる性質を利用し、強調などの修辭的效果を狙った表現が多く見られる。

6. 1. 意想外と想定外

特定化、具象化、属性化と言った機能が働かない場合でも、動詞によるプロフィールを経たカテゴリー化の機能が働く場合は、「基本的に軌道を逸した事態の発生」を表す。ただし、その感覚を持つ者の立場は一つではない。動作主にとって期せずして起こった事態を表現しているものと、話し手と読み手の双方にとって予想外の行為や事態が発生した場合の両方がある。

前者は、主語が動作動詞に対して、意思性を持たないもので、「主語にとってその意思とは関係なく予想外の事態が発生した」ことへの話し手の思いがけず驚いた感情が表現されている。(2. 6. “銅鑼子”の例)

一方、話し手と読み手の両方が想定外と感ずる場合は、一種の客観的な評価である必要がある。個人的ではない客観的な想定を超える基準とは、常識感覚を指している。これには、社会文化通念に基づく一般常識と、小説の文章表現全体から得られたコンテキストに基づく常識の両方が含まれる。この常識から逸脱する事態が発生した時、話し手が示した想定外な事態に対して、読み手も不合理や強いギャップを感じることが可能になる。このような用例には次のような条件が見られた。先行詞（又はそれに相当する語）が存在する、動作動詞の場合は、意思性がある。動詞の動作行為によって生じた状態を示すことの出来る結果補語（更に賓後を伴うことも有る）や様態補語といった成分が存在する。

6. 2. 感情移入

6. 2. 1. 書き手

“把個N”の構文によって、話し手あるいは作者は、その特別に焦点の当たっている事態に

対して、自らの立場や態度、感情を表現している。このような主観に基づく感情として、「驚き」、「不満」、「同情」、「後悔」、「顰蹙」、「怒り」、「喜び」などが表現されている。

話し手の感情の移入には2つの文の種類がある：

(1) 叙述文中：作者の考え、態度、立場を表現する。

例：把個和尚弄成了“黃瓜醃葱”——剩了個斜岔兒了。(6)

(なんとそんな和尚を胡瓜と葱の漬物みたいに斜交いに真っ二つにしてしまったのでした。)

(2) 会話文中（あるいは心中の想い）：会話の話し手の態度を表現する。

例：“不想我的乾女兒沒得認成，倒把個親女兒叫弟夫人拐了去了！”(32)

(「義理の娘になってもらいたいと思ったのだが、わしが言い出さぬうちに、反対になんとしたことか、実の娘をあんたの奥さんに取られてしまった。」)

6. 2. 2. 読み手

特定イメージ“把個N”と事実上のN2の間に「不合理」⁴⁵が存在する。読み手にとっては、“把個N”からN2への「ギャップ」(落差)として感じられるため、“想定外”の事態が発生した印象を受ける。この「驚き」や「意外さ」の感覚を生み出すことで、心理的な衝撃や強烈な心象が読み手の心中に描かれることとなる。

『兒女英雄伝』では、同じ場面での一人の登場人物に対して、「主述文の主語」、「把+N」構文の受事、「把+個N」構文の施事⁴⁶の3種類を、細かく使い分け、Nに対して、意識的に描写を変化させている場面も見られる。

例：安公子隨即出來，到了櫃房裡，只看那掌櫃的是個極善相的半老老頭兒，正在櫃房坐着，面前桌上攤着一本賬，旁邊擱着一面算盤，歸着帳目呢。見了安公子進來，起身道：“客人要甚麼？”安公子拱了拱手，道：“借問一聲：有位安太老爺家眷的公館在那條街上？”那掌櫃的聽了，把安公子上下一打量，問道：“客人，你問的可是那承辦高家堰堤工冤枉被糸的安太老爺的家眷麼？”安公子點頭道：“正是。”那老頭兒未從說話，先咳了一聲，道：“你還要問他的甚麼公館！這話說來真真叫人怒髮沖冠，淚珠滿面！”一句話把個安公子嚇得目瞪口呆，忙問：“却是為何？”那老頭兒纔拍着板橙道：“客人，你且坐了，等我慢慢的對你講！”這正是：(11)

(若様は、すぐに出てきて、帳場に行きますと、人のよさそうなごま塩頭の亭主が帳場に帳面を広げて、そろばん片手に帳尻を合わせているところでした。若様が入って来るのを見ると、立ち上がって言いました。「おや、何か御用で？」「ちょっとお伺いしますが、安様のご家族の官舎はどの通りでございましょうか？」聞いて亭主、その若様のことを頭のてっぺんから足の先まで見渡して、「安様と申しますと、高家堰の工事でお咎めをお受けになった安様でしょうか。」「その通りです。」と若様は頷いて言うと、その亭主は、エヘンと一つ咳払いして「ご家族が官舎にお住まいですかって？とんでもない、あなた。この話、話すだけでも腹が立って、とても涙なしでは話せるものですか。」と言

出した。この一言で、なんとあの若様が、驚きのあまり目を見開き口はあんぐりと開いてしまって、それから慌てふためいて聞きました。「何があったのですか？」亭主は、聞かれて、ポンと腰掛を叩いて「お客さん、そこにお座りください。一つゆっくりとお話して差し上げます。」と言ったのでした。）

このように、“把+個+N+Vp”構文は、話し手にとっては、一種の感情表現の方法であり、読み手にとっても感情移入しやすい表現となっている。この相互の感情移入によってストーリーへ引き込み、臨場感を持たせることが可能となる修辭的的技巧表現の一つであると言える。

6. 3. 主題化

『兒女英雄伝』の“把+個+N+Vp”構文全体に、主題化⁴⁷としての効果が見られる。主題化とは、森田（1989, p. 50）によると『「～について言うと、～に言及すれば』の意で、題目を提示するとき用いる。その場の誰かが既に話題にしていたり、自分が心の中で思い浮かべていたりした事柄を積極的に自分から引き取って題目化し、それをきっかけに関連事項を述べていくといった表現である。」これは、根本的には、“把”構文の性質に由来すると考えられる。ただ、“把+個+N+Vp”構文にすることで、一層の主観的な感情移入がしやすくなるため、効果が強く感じられる。例えば、次のような「前提に事態の設定があり、人物Nに話を向けると、N 2 という状況の展開になっている」というような表現方法について、“安太太”（aの部分）と“把個安太太”（bの部分）を比較してみると、bの“把個”による主題化の修辭的効果がよく見て取れる。

例：安太太 a 便讓張姑娘上炕去坐。只聽他低聲款語答道：“這斷不敢。我張金鳳此番隨了爹媽護送公子到此，原說給太太作些針線，或者作個指使，纔不是閑茶閑飯養閑人，日後名分所關，如何敢坐。”一席話，把個安太太 b 疼的，不由得趕着他叫了聲：“我的兒，你千萬不要如此！你在廟裡合咱們兩家那位恩人媒人說的話，我都盡情的知道了。（12）

（安の奥様は、張家の娘にも炕にあがってくるように言いました。彼女が小さな声でやんわりと「それは断じて出来ません。私張金鳳がこのたび両親と共に若様をお送りして参ったのには、もともと、奥様のお針仕事のお手伝いをしたり、下働きなどさせていだだこうと思ったからで、遊び暮らしに参ったのではございません。ご一緒させていただくなんて、そんな筋違いな真似は出来ません。」と答えた。この話に、安の奥様といったら、もう可愛くてたまらず、思わず大きな声で叫びました。「あなた、そんな風にしないで頂戴！あなたがお寺で私たち両家のご恩人、つまり、お仲人さんに話したことを私はすっかり聞いているのよ。）」

7. 其他の白話資料に見られる“把+個+N+Vp”構文

『兒女英雄伝』に見られる“把+個+N”の用例は、現代語に比べ種類も例文数も多い。『兒女英雄伝』に見られた用法で現存しているもの（注：北京人の語感による）は、「意外表現」ということから、『兒女英雄伝』の書かれた清末から現代にかけて北京語の中で発展した用法でないことは推測できる。（尚、他の近代白話小説においては、『兒女英雄伝』程多くの用例を見ることが出来ない。その原因究明については今後の研究課題である）

『老乞大』の間では、『重刊老乞大諺解』に一箇所書き換えが見られる。

『元本老乞大』：著箇銅盃，頭上頂水，（p.17）⁴⁸

『老乞大諺解（上）』：只是婦人打水，着箇銅，頭上頂水，（p.67）

『老乞大新釋』：那箇打水的女人們，放箇銅盃，在頭上頂水，（p.118）

『重刊老乞大諺解（上）』：都是女人打水：把箇銅盃放在頭上頂水，（p.169）

古くは、北宋『大宋宣和遺事』に“把個”の1例を見る。“把個門儿关闭闭塞也似，便是樊哙也踏不开。”しかし、“把個”の用例が多く見られるようになるのは、明代以降の白話小説のようである。『兒女英雄伝』における“把個”の用例は102例であった。各資料の文章の総量が異なるため一概に用例数の多少を比較することは出来ないが、比較的多く（50例以上）の用例が見られた作品⁴⁹を以下に挙げると、『西遊記』60例、『三宝太鑑西洋記』372例、『醒世姻縁傳』85例、『品花宝鑑』50例、『俠義傳』64例、『官場現形記』41例、『九尾龜』89例である⁵⁰。

ちなみに、『紅樓夢』は28例と少ない。これらの状況を見る限り、“把個”が使われている資料に一定の方言色などを見出すことは出来ないが、白話の「評書」等に多く用いられた講談調の場を盛り上げるための語り口調として多く用いられたのではないかと考えられる。

¹ 現代漢語の“把個N”、“把一个”に関しては杉村（1999, P. 359）に次のような分析がなされている。「把個N」における“个”はNの社会通念的属性を活性化させる（activate）ために存在していると考えたい。（用例略）通常なら前方照応（anaphoric）の「定」表現として不定の標識“个”を伴うことができない。それが“个”を伴っているということは、Nが類名・汎称として捉えなおされ、社会通念的属性が活性化された。現実には「定」であるにも関わらず、社会通念的属性や現況の活性化を意図して「不定化」されたのが“把個N”の“N”である。」更に現代漢語における“把個N”の用法はあまり見られないという。（この点について現代語を中心に、杉村（1999・2002）を含め、他に王（1985）、張（2005）等の先行研究がある。）

² 下線の~~~~~は先行詞N1に相当するもの、_____は“把個N”に該当する箇所を示す。

³ 「光緒4年本」、「光緒6年本」は“鬪”につくる。「抄本」は“鬥”につくる。

⁴ 例文末尾の（ ）は『兒女英雄伝』における章回数を示す。尚、縁起首回は（0）とした。

⁵ 照応関係：代名詞や名詞句などによって、文脈あるいは環境の中に存在するものや事柄、

人物を参照する現象を照応という。文脈を参照する表現としての代名詞や名詞句を照応表現、その照応表現が指示する対象を指示対象と呼ぶ。また、先行文脈中に明示的に存在し、照応表現の指示対象を文脈の中に導入するもとなった表現を先行表現と呼ぶ。照応関係は表層的には照応表現と先行表現の関係として捉えることができ、深層的には、照応表現と指示対象の関係として捉えることができる。(『認知科学辞典』(p. 395))

⁶ 例文に原文と記す場合は、論文中の引用例文の字体表記のまま記した。なお、「」内の論文の内容は筆者による翻訳である。

⁷ “最近苏连也有人把意义看做是语言之外的范畴。”(宋振華、劉伶『語言理論』等の数例を挙げる。

⁸ 図解のN1の噴出しに入る内容は、N2によってプロファイルされないN1の要素である。そのため本来は、N1に関する情報全てが含まれるものである。しかし図解においては、その一部の文中等に示された具体的な情報を例として挙げるに止める。(以下同様)

⁹ プロトタイプ:大堀(2002. b, p 33-34)に拠ると、「カテゴリーの中心メンバーはプロトタイプ(prototype)と呼ばれる(Roshc1975, Roshc&Mervis1975)。日常の知識構造を作るカテゴリーは、典型性の異なった様々なメンバーからなっている。この見方からカテゴリーを図で表せば、(図3. 2)のようになる。プロトタイプは黒い点で表した。まとめれば、カテゴリーには、中心と周辺があり、あるカテゴリーにどんなメンバーが属するかについての判断は、真か儀かというよりは、「らしさ」の違いによって、「良い例」から「悪い例」まで段階性を持つ。」プロトタイプのカテゴリーの模式図(図3. 2)



¹⁰ カテゴリーの定義:「ヒトの認知活動を支える柱の一つとして、受け取った情報をもとに有意なまとまりを作り出す能力がある。このまとまりをカテゴリー(category)という。

(例省略) カテゴリーをつくりあげるといことは、自分の活動する世界を適切に分類し、知識に組み込んでいくプロセスである。「分ける」ことは「分かる」ことである。これは単純な作業ではない。その背後には複雑なプロセスが働いている。そして状況の変化によって、カテゴリーは拡張したり変化したりする。カテゴリーを作り上げ、ある対象がそこに属するかどうかについて判断を行なうことをカテゴリー化(categorization)という。」大堀(2002. b, p 29)

¹¹ プロファイル:Langackerの認知文法における用語。大堀(2002. b, p. 15)には、「知識の成り立ち全般を含んだより広い用語として、ベース(base)とプロファイル(profile)という区分を新たに導入する。ベースとは対象を認知する際に、背景となる知識、プロファイルとはその中で焦点の当たる部分をいう。(Langacker 1987. a)」とある。

¹² 換喩 (metonymy : 大堀 (2002. b, p. 76) によると、「単一の概念領域の中で、プロファイルが移行することによって、成り立つ捉え方を言う。(Croft 1993) こうした操作を支えるのは、認知モデル的知識における部分——全体の関係であり、概念的な近接関係といえる。例として、「傘」を媒介として「雨天」を指し示すという近接関係によってなされている」という。更に、F. ウンゲラー・H. - J. シュミット、(1998, p. 159) は、「換喩 (metonymy) 表現の主要な機能は、同じモデル内の別のカテゴリーに言及することによって、ある認知カテゴリーを活性化することであり、そのカテゴリーやそれが属する副次モデルを際立たせることが可能となる。」としている。

¹³ 参照点能力 : 「ある事物の概念を想起して、それを手がかりにして、別の事物との心的接触を果たし概念化する」人間の基本的な認知能力を『参照点』能力と呼ぶ。Langacher (1993) (中略) 参照点が関与している別の例として、換喩がある。(中略) 換喩表現は、本来指し示す事物を参照点として想起し、そこから言語使用者にその表現が実際に表している事物との心的接触を促しているものと解釈することができる。」辻 (2002, p. 88)

¹⁴ 認知モデルに関して、F. ウンゲラー・H. - J. シュミット (1998, pp. 61-61) は、「私たちはそういう経験に対しておびただしい数の関連するコンテキストをも経験し、貯蔵しているはずである。認知カテゴリーというのは、それらの関連する直接のコンテキストに依存するばかりではなく、そのようなコンテキストと結びついているいくつものコンテキストの全体にも依存するわけである。それ故、ある分野に属する貯蔵された認知的表象の全てをまとめて指す用語があれば大変便利であろうと思われる。我々がこの知識のベースに対して用いたいのは、認知モデルという用語である。」としている。更に、大堀 (2002. b, p. 40) によれば、「カテゴリーの核となるのが、フレーム的知識であることは確かだが、ヒトの認知的活動には更に多様な知識が関わっている。プロトタイプ効果がどのように生じるかを考えるには、狭義の認知モデルに加え、典型的イメージ、社会・文化的に共有された行動の原則、感覚的な経験などにも注意を向ける必要がある。(中略) このような知識の複合体を、G. レイコフは理想認知モデルと呼んでいる。」と解説がある。

¹⁵ 漸層法 : 修辞法の一つ。語句を重ねて次第に文意を意味を強めていき、最後に最大の効果を上げるように導く技法。(『広辞苑』第三版による)

¹⁶ 辻 (2002, p. 28) に、よく似た英語の用例が見られる。「例えば、We all heard trumpet. (私たちみんながトランペットを聴いた)、I finally blinked. (私はたまらずまばたきした) のような表現で、実際に聴いたのはトランペットの「音」であり、「まぶた」が活性化領域である。つまり、「聴く」というプロセスに関わって実際に指示される領域、「まばたきする」というプロセスに関わって実際に指示される領域を指す。多くの表現では、活性化領域とプロファイルされる対象 (ここでは「トランペット」、「私」) との不一致が生じる。プロファイルされる対象を参照点とすると、活性化領域は、多くの場合、その一部に当たり、両者 (参照点と活性化領域) は厳密には一致しない。つまり、「音」がトランペットという全体の一部、「まぶた」が私という身体全体の一部であり、両者は「全体一部分」のような「近接性」の関係にあることが多い。」

¹⁷ このように常識的な感覚に情報を求めることで、文中の表現のみからは特定が難しい情報に対し特定化する方法は、英語の定冠詞の用例にも見られる。この問題に関して、(F. ウンゲラー・H.-J. シュミット (1998, p. 256) の「フレームからスクリプトへ」という項目に興味深い挙例と解説がある。「例：Sue caught a plane from London to Paris. After she had found her seat she checked whether the life vest was beneath it, but she could not find it. So she asked the flight attendant to find one for her. (スーはロンドン発パリ行きの飛行機に乗った。自分の席を見つけてから彼女は救命胴衣が席の下にあるかどうかを見たが、なかった。そのため、彼女は客室乗務員に自分の分を持ってきてくれと頼んだ。) ここで問題にしたいのは二度出てくる定冠詞theである。英語の文法によれば、定冠詞は、自分がどの人または物について言っているのか聞き手が知っていると話し手が想定している場合に用いられる。もしそうでなければ、第一文のa planeのように、不定冠詞が用いられる。こういう規則があるとすると、なぜlife vestやflight attendantに定冠詞が付くのだろうか。どちらもそれ以前に言及されているわけではないし、後で具体的に特定されているわけでもないのである。(中略) その理由は、定冠詞の使用を理解するに当たって、私たちは世の中の一般的な知識に基づく推論 (inferences) を行っているからなのであり、それはコンピュータが苦手とすることなのである」。結婚式につきものの林檎も、飛行機のlife vestやflight attendantは文脈から想起する常識から十分推定し得る内容なのである。

¹⁸ その他に『済公全伝』などにも用例を見る。

例：我姐说了，叫卞员外这就娶，带了银子，新人下轿，叫卞员外亲给新人一个苹果，平平安安的。(131)

¹⁹ この時の林檎は王 (1985) の言う“專指”に相当するものである。

²⁰ 大河内 (1985, P. 6) には、固有名詞に“一個”がつくケースの説明として次のような説明がある。「(例省略) “有这么个人”とは、その人の性質や属性、つまり内容をなすものを話者、聞き手が十分に知っていて、その性質や属性の方を指示して話をすすめるのである。内容を知らない人に対して、“这么个人”とは言えない。」同様の指摘は、杉村 (1999, p. 359) にもある。「朱德熙 (1982) は“偏偏又把個老王病倒了”を解説して“老王虽然是一个确定的人，可是说话的人没有想到生病的会是老王，而不是别人”と述べているが、“个老王”とすることで“老王”の“身强力壮”の類いの意味が活性化するのであろう。しかしこのような表現は“老王”の普段の健康状態や体力を知っている人にしか作れないし、また理解もできない。」

²¹ 呉 (1996, pp. 417-433) がいうところの「致使義処置式」に相当する。

²² キセルを人体に見立てた比喻第37回の例を含む。

²³ 『兒女英雄伝における“把”構文』では次のように分析する。処置義：「一種の主体性のある動作によって得られた結果を表す」、致使義：「因果関係 (関係が比較的弱いものも含まれる) によって生じた結果を表す」主な意義は、「(ある要因) が、NがCという状態になるのをVという動作行為で引き起こさせる」

『兒女英雄伝』における“把”構文の「致使義」には、薛 (1994, pp. 46-47) がいうとこ

ろの、文法構造: A把B + C」において、「Aの関係に因って、BがCの描写する状態に変わる。(AはどのようにBを処置したかではない)」意味は、「NがVという動作行為を行うこととなる。」(VCの場合はCという状態を伴う。) というもので、これは、「Nに影響(刺激、外圧)を与える力を持ったものが、NがV(C)する行為(状態)を引き起させる」という解釈が成り立つ。

²⁴ 何れの解釈にせよ、動作を行うのはN自身であるが、前提にはNの動作行為を誘発する原因が存在するという共通点がある。これは、Nが施事の“把”構文が、致使義であることに関係がある。致使義の場合、“把”構文の意義の項目でも既に述べたように、現代漢語の致使に関する研究で胡(2005, p. 27)等が主張する「A把B + Cの語法上の意味は、「致使」の根源であるAに関係があり、“把”字の賓語は、Cが描写する致使の結果の状態にある。」という定義にも一致する。日本語においては何れの訳も可能であるが、処置義とすると「AはBにCさせる」という使役表現にも類似した理解となるため、中国語の語法面では致使義の方が自然な解釈と考える。そこで、以下訳文などは施事の解釈を以って記す。

²⁵ 拙稿『儿女英雄伝の言語に関する研究』第6章『儿女英雄伝における“把”構文』において、間接的致使義に分類する構文である。結果を表すもので、NとVには施受関係がない。動詞句のVとCの動作主が異なる用法である。VはS(主語)の動作であり、CがNの状態である。意味は、「(S)がVという行為をすることによって、NにCという状態を生じさせる(“由于S做了V、使得N生产了C的状态”)」ものである。この場合必須条件として、構文が(S) + “把” + N + V + C構造である必要がある。Cは必須の成分で、Cが無ければ、Nの結果としての状態を表すことが出来ないからである。

²⁶ 「光緒4年本」、「光緒6年本」は“瞅瞅”、「抄本」は“瞅瞅”につくる。

²⁷ 以下、構文構造の解説で“個”以外のその他の量詞を指す場合はXで表記する。

²⁸ 杉村(1999, p. 350)では、「“个”以外の量詞からなる“把個N”が極端に少ない理由がまず大きな問題となるが、結論めいたことを先に言うと、量詞が“根”、“块”である④の3例(例文④a: “当然, 我没忘把根烟放在手上。顺势我拍拍小三示意他回去。”、例b: “他把根烟捏在手里摆弄。‘我今晚睡这儿?’” 例c: “‘给!’ 玉屏把块手绢儿一下甩到宝山脸上。”)からは、①や③(例文①“辰很体谅叶公, 真龙, 就像条大蝎虎子, 把個光不溜的脑袋伸进来了, 谁不害怕?” ③“杨杰看他缸里水干了, 挑起水桶, 不大一会儿, 给老汉挑了两担水, 把個老汉感动得简直不知说什么好了。”(例文は一部抜粋))の“把個N”が持つ「Nに対する思い入れ」「事態の顛末に対する驚き」といったニュアンスが感じられず、眼前に展開された事件を記述する“把一个N”となんら択ぶところがないように思われる。つまり“个”以外の量詞では、“一”の有無による意味的な対立が存在せず、“把個N”と“把一个N”という二つの形式を要求する動機が希薄で、ここに“个”以外の量詞が極端に少ない理由があるように思われる。事件を記述するということになれば、言うまでもなく、Nに対して専用量詞の使用を許容する“把一个N”の方が望ましい。」と述べられている。

²⁹ 「光緒4年本」、「光緒6年本」は同であるが、「抄本」は、“説着, 一路低着腦代來在屋裡, 抓了個小枕頭兒, 支着耳根台子躺下了, 只把那小枕頭看着, 暗暗的垂淚。”となっている。(太

字の部分に相違)

³⁰ 例外として、第40回に一例“大圣人”があるが、これは、孔子への別称として使われている用例である。

³¹ “些”の前の省略には、2種類の可能性がある。“一”を入れ“一些”とすると「一部分」の意味になる。また、指示代詞を入れ“那些”とすると、「それら全部」の意味になってしまう。ここでは前後の文意から考えて“那些”の“那”の省略である。

³² 1. 中年人脸上浮起一层微笑。2. 这短短的一段情景中的每一细节，一个微笑，一个眼神，都深深地印在这青年的心理。

³³ ここでは量詞全体について指摘している。

³⁴ これらは、他の数詞に入れ替えることができず、一般的な量詞とは言えない。劉（1999）では、このようなものを空間量詞と呼んでいる。

³⁵ “把個N”と“把一個N”、“把XN”と“把一XN”の使用頻度に関して、次のように述べている。「まず、構文としての使用頻度数から言うと、“把個N”は“把一个N”に遥かに及ばない。また次に、量詞“个、件、只、张、条、根、块、棵、把、杯、碗、些”について調査した結果、“把一个N”は、すべての量詞について用例が見られたが、“把個N”で用例が得られた量詞はわずかに“个、根、块”のみであり、数量的にも“个”の用例を除くと3例のみであった。」つまり、この分析結果によると現代漢語においては、量詞が“個”であるか否かに関わらず、“一”のある“把+一+量詞+N”型の方が、“把+量詞+N”型よりも使用頻度が高く、量詞の種類においても多様で、優勢ということになる。

³⁶ この他、安井（2003）も属性の問題に触れる。「また、安井（2003, pp. 157-158）は、数量詞の機能について(a)数量表示(b)不定表示(c)属性表示の3つに分けている。この中に、“个”に関する(c)の属性表示の機能に関する次のような説明がある。「“个”は一般類別詞と呼ばれ、専用類別詞を持たない名詞や抽象名詞に用いられ、専用類別詞の代用としても使われるが、他の量詞と同様やはり類別詞であり、属性表示の機能を持つ。つまり、(a)は“一个人”等の「一人の人」、(b)は“有一位杨庄的余小爷”のように「～という人」、(c)は、“他是个五十多岁，极忠诚，极谨慎的一位办中等教育的老手。”という例の如く、“个”によって、主語“他”の属性が、“五十多岁，极忠诚，极谨慎”を認識し、“一位”によって、“他”が“办中等教育的老手。”であることを認識しており、“个”は連体修飾語によって表されている属性のみにアクセスしていることが分かる」としている。

³⁷ 『広辞苑』第三版による。

³⁸ 前項目2. 4. の例などは、動作の行われる最中のNの状態である。

³⁹ ③指示的共有のみ、賓語Nの前に指示代詞が必要となる。

⁴⁰ 『儿女英雄伝』は、Nに固有名詞以外の賓語を多種多様に取り用例数も多い点では、特殊である。他の白話資料に見られる例は、大半がNが固有名詞である。

⁴¹ F. ウンゲラー・H. - J. シュミット（1998, p. 56）は、カテゴリーと認知・文化モデルの関係について次のように解説する。「一般的に言うと、あるカテゴリーの内部構造が全体としてどうなるかはコンテクスト次第、そしてさらに広い意味では、私たちの社会的、文化的

な知識がどのようなものであるか次第であるように思える。このような知識は、認知モデル、文化モデルという形で体系化されていると考えられる」

⁴² フレームとは、大堀（2002. b, p. 36）によると、「カテゴリー化の特性を理解するには、そこにどんな知識が関わっているのかを知ることが必要である。これまでの研究によって、われわれの知識は典型化された日常的な場面をもとに成り立っていることが示されている。このような出来事を理解する枠となる知識構造をフレーム（frame）と呼ぶ。言語学ではこの概念はフィルモア（Charles J. Fillmore）によって提唱された。（Minsky 1975, Fillmore 1975, 1982, 1985）。例えば、「いい風」というとき、爽やかな微風を想像するのは、日常の活動というフレームの中で、程よく吹いている風が肌に心地よいという知識があるからである。他の特別な活動（サーフィンなど）についてのフレームが選ばれたときには、「いい風」の意味も異なるであろう。フレームは日常の経験からスキーマ化を通じて形成された、容易に想起が可能な知識である。カテゴリー化においては、こうした知識が深く関わっている。」

⁴³ 日本語では、単独で名詞に置き換えられる「あの、この」は、「代名詞」で、「あの～、この～」と名詞に前置される「あの、この」は連体詞に分類される。また、フランス語などでは、前者を指示代名詞、後者を指示形容詞と呼んで区別している。それゆえ、更に厳密に言えば、“把個”は、この連体詞や指示形容詞に近い機能を持つと表現すべきである。ただ、此处では、“把個”の指示性を問題にしているので、そのことから代名詞という用語をそのまま引用した。

⁴⁴ 先行詞（N 1 又は n 1 等）の大カテゴリーに対し、“把個N”は、プロファイルされた内包の小カテゴリーと考えられる。先行詞（N 1 又は n 1 等）が有る場合は、Nの間には照応関係が成り立っている。

⁴⁵ 杉村（1999）では、「矛盾」と称される。

⁴⁶ “把”構文の分析において、受事、施事何れにも解釈可能なものとして分類している例であるが、本稿では翻訳においては施事の解釈を取り入れている。

⁴⁷ 日本語の主題化には、表現によって、次のような感情と関連した使い分けがある。森田（1989, P 50-55）抜粋に拠ると次のようなものがある。

「～といえば、～という」とは題目提示の複合辞としては、特別な意味の付加されていない最も無色透明で、代表的な表現である。

「～といたら」は、感嘆・驚きなどの感情を誘発した事柄を題目化しているもので、それだけ話者の感情が強く込められている。

「とくると」「ときたら」

ある事物を題目として取り立てる機能を果たす。話題の展開がある点に及ぶのを見計らってこちらがその話題を引き取ると言った姿勢が感じられ、「といえば」「という」とに比べ消極的・受身的といえよう。

「に至ると」「に至っては」

ある事物を題目として取り立てる機能を果たす。特徴的なのは、段階的に事物を捉えながら最終的にある段階・ある情況・地点に達したという意識があることである。その点で「とな

ると」などとも近いが、こちらのほうが段階性。執着性の意識が強い。

⁴⁸ ページ数は、『朝鮮時代漢語教科書叢刊』第1巻，中華書局，2005年による。東洋文庫『老乞大』，平凡社，2002年では27話に収録される。

⁴⁹ 『醒世姻縁伝』は、北京大学言語研究所データベースを使用、その他は「中国基本古籍庫」による統計を活用した。

⁵⁰ 大半が“把+“个”+人名+「感情を表す動詞又は知覚動詞」+“得”の形式であり、全体的にNや形式に偏りが見られる。

参考文献：

- 相原茂 1985. “親嘴”の“嘴”は誰のもの？, 『明治大学教養論集』外国文学, 通巻176号, pp. 25-52
- 深谷昌弘・田中茂範 1996. 『コトバの〈意味づけ論〉』, 紀伊國屋書店
- F. ウンゲラー・H. - J. シュミット他 池上嘉彦等訳 1998. 『認知言語学入門』, 大修館書店 (原文: Friedrich Ungerer & Hans-Jörg Schmid, 1996. 《An Introduction to Cognitive Linguistics》)
- 三浦つとむ 1967. 『認識と言語の理論第2部』(新装版2002), 勁草書房
- 三浦つとむ 1972. 『認識と言語の理論第3部』(新装版2002), 勁草書房
- 森田良行・松木正恵 1989. 『日本語表現文型』, アルク
- 日本認知科学学会編 2002. 『認知科学辞典』, 共立出版
- 大河内康憲 1985. 量詞の固体化機能, 『中国語学』, 第232号, 日本中国語学会, pp. 1-13
- 大堀壽夫編 2002. a. 『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』, 東京大学出版会
- 大堀壽夫 2002. b. 『認知言語学』, 東京大学出版会
- 杉村博文 1984. 処置と遭遇——“把”構文再考, 『中国語学』231号, 日本中国語学会, pp. 11-24
- 1992. 場所を処置対象とする“把”構文, 『中国語』, 9号, 内山書店, pp. 34-37
- 1998. 文法—データ・分析・記述・生成—, 神奈川大学中国語学科編, 『現代中国語学への視座』新シノロジー・言語篇, 東方書店, pp. 69-92
- 1999. “把個老漢感動得……”について, 『現代中国語研究論集』, 中国書店, pp. 347-262
- 2002. 論現代漢語“把”字句“把的賓語帶量詞“個”, 『世界漢語教学』第1期, pp. 18-27
- 2006. 量詞“個”的文化属性 激活化効能和語義的動態理解, 『世界漢語教学』第3期, pp. 17-23
- 田中茂範 2007. 『NHK新感覚・わかる使える英文法』, 8月号, 日本放送出版協会
- 土井和代 2000. “把個N”の“個”について, 『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第4輯, pp. 27-45

“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について

- 王還 1985. “把”字句中“把”的賓語, 『中国語文』, 第1期, pp. 48-51
- 呉福祥 1996. 『敦煌変文語法研究』, 岳麓書社
- 安井二美子 2003. “是(一)個N”の認知言語学的アプローチ, 『中国語学』, 250号, 日本中国語学会, pp. 151-170
- 張誼生 2005. 近代漢語“把個”句研究, 『語言研究』, 第3期, pp. 14-19

参考資料:

例文は、『兒女英雄伝』光緒4年刊本聚珍堂書房木活字本, 『古本小説集成』収録影印版(山東大学図書館蔵)に拠る。本文中では、「光緒4年本」と略称する。ただし、標点については、還読我書室主人評『兒女英雄伝』(上・下)董恂評爾弓校訂注積齊魯書社1989年を参照し補足した。

更に、『兒女英雄伝』39回抄本1函18冊中国国家図書館旧館蔵、『兒女英雄伝』光緒6年刊本聚珍堂書房木活字本を参照し、明らかな語句の相違については、注を付し補足した。それぞれ「抄本」、「光緒六年本」と略称する。

なお、本稿は平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)、「清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究—公用語の脈流を視座に一」、研究代表者:藤田益子、課題番号19520333)の成果の一部である。